

ハイスクール・フリー
ト～北の海より愛をこ
めて～

葉桜照月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【3月頃まで休載します、詳細は活動報告参照】

「教育艦、大和。：あ、戦艦じゃないですよ。全長65m、3本マスト帆船、船齢130。
そんなオンボロ艦です。」

アニメのRATT騒動を、舞鶴女子所属艦「大和」の視点で綴る話です

原作で詳しく触れられてない部分について、一部独自解釈アリ。それ以外はおおむね
原作準拠（↑一部架空艦出します）

ハーメルン初投稿なので見づらい点などご容赦ください

多分百合ほぼ出ないです

スピノフ（アウト）ですが非クロスオーバー。

目次

0話	1	55
1話 イワシ釣つて名前呼んで発進	1	67
2話 早速寄り道して豪邸行つて停滞	1	
3話 推理して不穏な報告もらつて暗雲	1	
【お知らせ】 報告と世界観解説	1	
4話 電話して電話して長電話	23	
4・5話 ?各海洋女子校所属 測量艦	29	
リスト	36	
5話 会議してぐだりにぐだつて柏原	49	
六話 不法侵入と学歴開示祭り——不法侵入編	55	
七話 不法侵入と学歴開示祭り——学歴開示祭り編	67	
八話 暗躍——Side；島村悠希菜	80	
九話 暗躍——Side；国東詩歌	95	
十話 砲火は飛べど、飛び交わぬ	111	
十一話 鉄拳乱舞	128	
五話 会議してぐだりにぐだつて柏原	133	

0話

舞鶴海洋学校所属のとある教育艦。

その名は「大和」。

奈良の旧国名を冠するその艦艇は、今、故あつて知床半島の沖にいた。
ここで大和はある重大な任務に就いていた。

海洋国家たる日本という国をささえる、重大な重大な任務を・・・。

船員はいずれ劣らぬ優秀な者ばかり。

今日も羨望と期待を一身に受けて、彼女らは戦い続ける！

ゆけ大和！　日本の未来のために！

どんな困難があつても、その46cm砲で破壊するのみ！

巨艦、巨砲、高速、高燃費。

艦齡、130オーバー。

我が国の誇る稀代の名鑑、その艦長帽を被る女・七島珠洲が今、高らかに宣言する！

「大和、発進！」

戦艦大和大勝利！希望の未来ヘレディ・ゴーッ!!

「艦長ー？」

「げ、副長・・・」

「何を書いてるんですか？」

「妄想」

「妄想っていうか・・・完全にウソ、ウソ。ウソじやないですかこれ!!」

「だつて妄想だし」

「ええ・・・」

「いいじやん別に」

「ダメです！いい加減に現実を見てください！」

「妄想なのにダメ出しされた」

「正しいのは『船員はいずれ劣らぬ優秀な者ばかり』までですよ！」

「あつそこはいいんだ」

「いいですか、改めて説明するまでもないですが、・・・一応言いますよ。

・たしかに『大和』ですが、呉の超大型直接教育艦とは別物です。

- ・舞鶴の測量支援教育艦・大和です。
- ・こちら排水量はなんと1／32！すごいでしょう？
- ・艦齢130オーバーはマジです。日露戦争も経験したロートルです。
- ・なんで三笠は係留・保存されてるのにまだ現役なんでしょうね。
- ・既に10回近い大改装を経て、もとの大和とは所謂「テセウスの船」状態です。
- ・46cm砲は積んでません。搭載されたてのボフォース40 mm L／70機関砲があるだけです。
- ・巨艦でもありません。65mしかありません。
- ・そして半分帆船なので燃費は風次第です。
- ・もう我々がこの船のつてから1年経ちますから、いい加減覚えてください！
- ・・・わかりましたか？
- ・・・・・・・・
- ・・・つて、いないし！どこ行つたんですか艦長!!
- 「んー？艦長なら釣りに行つた！」
- 「はあ何で止めてくれなかつたんですか!?」
- 「ひとり言ウケルw」
- 「ひどい！」

「(笑)」

「ひどい!! いつからですか!?」

「たしかに『大和』ですが、この時点で居なかつた」

「めちゃめちゃ最初の方じゃないですか」

「マジ卍」

「ひどい」

「・・・(トントン)」

「あら、国東さん? 紙? これは・・・電報?」

「・・・(コクツ)」

「あ、舞鶴からの指示ですね。艦長に渡してきます。常陸さん、国東さん、一旦艦橋を任せます」

「りょ! ウチにまかせて、副長!」

「・・・(コクツ)」

「じゃあ、回収してきます」

「ほーい」

「・・・」

「釣りつて言つてたから・・・多分甲板ね。行つてみよう」

1話 イワシ釣つて名前呼んで発進

——紋別沖 2016/4/6/1620

舞鶴女子海洋学校所属の教育艦「大和」。

その艦長、七島珠洲。

普通の高校で言うところの2年生になる我々は、艦を預かってからもう1年が経ち、すっかり海に生きる女らしくなった……と思う。少なくとも私はなつたと思う。この船の副長として色々なことを体験してきたからだ。

ましてや艦長など私達に比べたら仕事量や責任はずつと大きい。そこから由来するストレスや使命感もまた、私たちの比ではないだろう。その人物が、

「……いた」

今、目の前で、

「艦長」

「……」

釣糸を海に垂らしている。

「かーんーちょーう??」

「ん」

艦長は釣り糸を凝視したままで返事をした。

「舞鶴より入電です、読みますよ」

「ん」

『舞鶴から大和へ通達。貴艦は遂行中の任務完了後、北東へ航行し、幌筵島の柏原で補給を行つた後で幌筵海峡にて特殊任務に当たれ』：だそうです』

遂行完了後、とある。つまり舞鶴のほうはまだ我々は任務遂行中だと思つていたようだ。

がしかし、実はとっくに任務自体は完了している。帰るのがだるいので、航行中のタービンの不調による速度低下を理由に任務完了報告を遅らせていたのだ。

当然艦長の判断だが、もう艦長がこういうことを平氣でするのは慣れっこだし、帰つてもどうせすぐまた遠くまで行かされることも分かりきつてゐるし、何よりも私達の任務が重要で、また私達自身の成績も優秀であるから多目に見られているのが大きい。

艦長のカンもまた冴えていることも理由のひとつだ。今回たまたまオホーツク海まで来てのんびりしていたいるから幌筵島：つまり千島列島のかなり北の方まで行けと言われても割りきつて対応できるのだが、任務完了直後にハイスピードで直帰するコ一

スだつたらこうは行かなかつただろう。恐らくは津軽海峡、悪くすれば栗島沖まで南下していたかもしれない。

「遠いね」

艦長は釣糸を凝視したまま返した。

「まあ紋別沖まで来ていますから。舞鶴で聞かされなかつただけマシでしょう」

「…ん」

「艦長、柏原つてどんなどこですか？」

「北千島最大の有人市街。20000くらいだけど」

知らなかつた。艦長は、さすがと言うべきか地理関連の知識がかなり豊富である。

艦長は、実は千島列島に關してはプロだ。大学教授並みの知識を持つてゐる。詳しく述べ知らないが、時々誰かと電話でレベルの高い会話をしているようだ。

「それで最大…。寒いから人が少ない…ということですか？」

「それと火山。環太平洋造山帯を形成するから活火山が豊富」

「カムチャツカ半島のようなものですか」

「千島は『噴火による火山ガスでふもとの集落が全滅した』みたいなニュースに事欠かな

い」

「めちやめちや危険などころじやないですか」

「私もそんなかんじのところで育った」

「艦長つて千島の生まれなんですか」

「ん。択捉紗那島の紗万部つていう、沈降前は択捉島つていうひとつの中だつたとこの真ん中あたり。火山の麓のいい村だ」

「成程、知りませんでした。ではもうタービンまわして…」

「…来たッ！」

「艦長？ 出航しますよ？」

「副長。黙れ。魚が逃げる」

「ええ…」

「ラーッ!!!」

「魚が逃げるのでは!?」

――

艦長の握つた釣り糸には、魚がぶら下がつていた。

「マイワシ」

「ええ、見ればわかります」

知らなかつたけど。魚だつてことしかわからなかつたけど。

「私が釣つた」

「ええ、見てればわかります」

それくらいはわかる。

「私が食べる」

「ええ、知ります」

いつも艦長が自分で食べてる。

「やつた、夕食は丂イワシだ」

ここまでやり取りをして、気付く。

多分艦長がやりたいのはここまでの一連のやり取りだ。

「…もういいですか？」

「いいよ」

「じゃあ艦橋に上がりましようよ」

「他のみんなは」

「もう呼んでます。全員とつくりにいますつて」

「…」というと、艦長は親指を立てて言つた。

「有能」

「艦長が無能なんですよ…」

つていうかアンタさつきまで艦橋にいたら。（0話参考）

「もつと褒めて」

「褒めてないですよー?」

そこまで言うと、艦長はふう、と一息ついて釣具を仕舞い、立ち上がり、「行こう、千島へ」

「だからそういうじやないですか」

そこまで言うとお互い無言で艦橋に向かつた。

艦長がやりたいことはもう終わって、仕事モードになつたのだった。

「あ」

「どうしましたか」

「調理室に渡してくる」

⋮なつてなかつた。

艦橋。

「点呼どるよ。副長、高柳うしお」

「はい」

「航海長、常陸樋芽子」

「ういーっす」

「書記、国東詩歌」

「…（コクツ）」

艦橋要員、私含め四人。

「砲雷科」

「はい。射撃指揮所神若、駒ヶ岳両名います」

「水測員幌内、います」

砲雷科は三名だ。

「航海科」

「マストは島村、今井。います」

「電信、平山茉莉」「電測、平山杏奈」「います」

「続いて操帆担当から。操帆長那須野以下6名、既に持ち場についています
航海科は操帆担当含め、10名いる。

「機関科」

「機関室に全員いる！」

「お、応急工作、嵯峨野も、いいい、いますよ…」

機関科も4人。

「主計科」

「主計長・荻原。おりましてよ」

「炊事、神宮寺・鈴木。いるつスよー！ちなみに今夜のメニューは…」
 「神宮寺黙つて。保健室朝田、います」

主計科四名。

「測量専科」

「測量長・高遠。以下、大雪、高野、夜叉神、堀江。全員います」

測量は基本全員ですが、主導となる測量専門担当が5人いる。

以下、大和乗員、計三十名。

「オーケー、26人全員いるね。」

拔錨、発進準備を。タービン準備出来てる？OK。総帆展帆用意。これより本艦は北東へ転針、千島列島の幌筵島北東部の港町・柏原へ向かう。各員はさらなる気温低下を警戒し、耐寒装備を整えられたし

「よし。呉女子海洋学校所属、K117・超大型直接教育艦・「大和」、出発するよ」

「……（ハア…）」

「……それやらないと死ぬ的な？」

「艦長。いつものことですが…」

「…ロマンがないなあ…」

「ダメです」

n回目のやりとりだ。

「はあ…。分かつたよ…。

舞鶴女子海洋学校所属、M2401・汽帆兼用測量支援教育艦・「大和」、出発するよ。
操帆班、出帆用意。

右60度、タービンは原速航行。タービンの回転については、風の様子を見て判断。
各員は引き続き各々の職務を遂行。

砲撃担当はもしもの戦闘に備えてレベル1の待機状態を継続。こちらの指示から40秒以内に攻撃出来るよう心掛けること。

各マスト見張員はそれぞれ引き続き警戒に当たれ。また付近を航行する船舶を発見した場合も艦橋へ報告。手旗信号員はあらかじめ決めておくよう。

また、各マストに1名づつ記録員を配置。流水や結氷、冰山を確認した場合は速やかに記録、報告せよ。

それ以外の各担当はそれぞれ通常待機状態を継続し、必要があれば直ちに待機状態を解除し艦橋へ報告をいれること。

各員への連絡は以上。現在時刻は西暦2016年4月6日1627。不明瞭な点は直接艦橋に知らせ。ではタービン回せ、大和、発進!』

・・・いやホント、やるときはやるんですけど。この長い指示を淀みなく言える人間

が、さつきまで任務ほっぽつて釣りしてたんですよ、信じられます？

「そういえば入学式シーズンですね」

「もーそんな時期？マジ？」

答えたのは常陸だつた。

「もう演習が始まつてるらしいですよ」

「場所は」

艦長が尋ねる。

「西之島新島沖です」

「え」

艦長の動きが止まつた。…いつものことだけど、まあ、文脈的になんか驚いてるつぽいですよ。

「どうかされました艦長」

「西之島新島は最近の火山活動の影響で海上及び海底地形が変化したばかり」

「測量されてるんじや…？」

「まだ」

「…（？）」

「は?」

「危なくないですか!?」

「危ない」

「潜水艦とかやべーんじやね?」

「航洋艦も十分危険、座礁する」

「あつそうか」

ざわざわする艦橋を代表して艦長が締め括った。

「嫌な予感」

もつとも、まさかあんな大事になるとは艦長すら予測していなかつたようだけれど。

二話 早速寄り道して豪邸行つて停滞

——オホーツク海 北国後島沖 2016／4／6／1930
「艦長、相談が」

と、伝声管で話を切り出したのは、炊事長の神宮寺抄だつた。

「なに」

「いやあ、これからいよいよ任務に行くつて時に水を差すようで悪いんスが……」

「遠慮はいらない」

「ありがたいっス。いや実は、味噌が足りんっスよ」

「味噌」

「不肖この神宮寺、不注意で使いすぎました。無くなりそうなんスが、どつかで補給でき
ないっスかね」

「味噌……味噌か」

さすがに渋つている。むやみに停泊するとサボつてるのがバレるかららしい。

前に話してくれたのだが：いや、その理由はどうなんですかね。

「このままだと艦長の釣つた折角のイワシ、みそ煮に出来ないっスよ」

「補給しよう」

悲しいほどに即答だった。

「ここからだと、補給できるのは紗那しかないですよ」

「というと、艦長は微妙な反応を返した。」

「紗那か…」

「何か問題が?」

「いや…。ま、大丈夫か?」

「?」

「なんだろう。」

紗那と言つたら艦長の故郷に程近い。何か帰りたくないのだろうか??

—— 択捉紗那島 紗那別飛港 紗那第四埠頭 2016/4/7/0200

紗那は、留別村、蘂取村と並んで旧択捉島を形成していた紗那村の村役場所在地で、かつ現在も旧択捉島地域——現在は択捉列島という主に7つの島となつてゐる——のみならず、千島列島全域でも最大の街だ。同時に、択捉列島、国後諸島、色丹群島からなる南千島にそれぞれ一つずつ存在するフロート（紗那、古釜布、色丹）の一角でもある。

ちなみに、かつて歯舞諸島と呼ばれた島々は完全に海没し、現在は歯舞群浅堆と呼ばれている。平たいその地形を生かし、新たな海上都市を建設しようとの声も上がっているが、好漁場であるため地元漁協の反発も根強く、具体的な話は進展していないらしい。

列島沈降の影響を受けた紗那は、もともとが散布半島の西の付け根に存在したため、深く開けた湾となり、東の付け根である別飛とともに良いフロートの設置場所となつた。紗那と別飛の間には三本の運河が通り、紗那別飛港というひとつつの港という扱いになつていて。豊かな地形を生かして、現在では北海道第五の大港湾にまで発展した。規模的には苫小牧を超えて道内一の港になるポテンシャルを秘めているが、如何せん近くの外国の港に恵まれていない。アンカレジやペトロハヴロフスク＝カムチャツキーなどは得意先だが、ポロナイスクやコルサコフまで来ると小樽に持つていられる。これには小樽は札幌が近いのも大きい。その点でも紗那は恵まれていないといえる。

『はちら紗那港。夜遅くお疲れ様です。：つて舞鶴の大和？ああ、珠洲じやねーか！元氣が！』

〔想い予感が…〕

〔父だ…〕

「ここで働いてたのか？：

『で？何の用だい？』

「補給と一旦休憩。別飛に移りたいけど、運河使える？」

どうやら艦長は父親と遭遇したくなかったようだ。

『おう、第一運河なら使えるぞ。今すぐがいいか？』

『いや、今日はもう営業終了』

『あいよ 停泊な。そうか、じゃあ朝になつたら家に寄るか？』

「絶対嫌だ」

「え、艦長の実家普通に行きたすぎるんだけど（笑）」

「⋮（コクツ）」

「興味ありますね」

めつつつちや興味ある。

『ほら、御学友もそう言つてるぜ？』

「うう…」

—— 択捉紗那島 紗万部 七島邸 2016／4／7／0900

翌朝、艦長と私と神宮寺さんは、艦長の父親の車で紗那郊外にある艦長の実家に来て
いた。

「広い…」

「広いつスね…」

広い。豪邸だ。しかも陸上である。

沈降によつて、陸地として残つた部分の地価は急激に高騰した。

そもそも沿岸部に都市の集中してゐた我が国においては、海洋沈降は非常に大きな問題であつた。當時陸地で最大の都市はかつては「桑の都」と謳われるほどに養蚕業と絹織物産業が盛んだつた東京府八王子市であり、また絹織物は當時主要な輸出品であつたために、ここに首都機能を移転しようという動きも生まれた。『海上の人工都市を国を中心とするのは天津神の創生せし大秋津洲に対する冒涜だ』という神道原理主義勢力も絡んでこの首都移転運動は一時世間を席巻した（ダジャレじゃないよ）が、結局は天皇陛下のおわすところが我が国を中心であるという考え方により、帝都八王子の称号は東京大フロート竣工までの臨時として位置づけられた。

話がそれたが、陸に新しく居を構えることはそう簡単ではなかつた。豪邸とあらば尚更である。そうなると七島家は沈降前から大地主としてここに大豪邸を持つていた由緒ある一族か、高騰した陸地にこれだけの豪邸を築けるブルジョワジーのどちらかということになる。やばい。

そんなことを神宮寺さんと再確認していると、艦長の父親—お父様と言つた方がいい

かもしれない——が割り込んだ。

「ははは！ そうだろそうだろ！ だがなんせ田舎だからな！ ジーさんは安く買ったそうだぜ！」

「父さんやめて……」

いや、でも、それにしても実際広い。初めて見たこんな広さ。

「おや、お嬢さまお帰りなさい」

屋敷の中に入ると、待ち構えていた執事さんっぽい人が言つた。

「お嬢さまですってよ奥様」

「言われてみたいつスね：」

「やめて……」

艦長つたら、さつきからやめてとしか言つてない。

「さつきから正氣を保てていませんよ艦長」

「正氣しか保つていないよ副長」

「絶対保ててないつスよそれ」

こんな艦長は珍しい。カメラを持つて来ればよかつたが。

艦長のお母様は優しい方で、私たちを丁重にもてなしてくれたし、会話をしても極めて多岐にわたる分野において浅からぬ知識を持っていることが分かる人でもあつた。

なぜこの人と暑苦しい紗那港職員から任務遂行報告を平気で遅らせるような盆暗干物が誕生したのかよくわからない。

他にも艦長の実家に一というより友人の実家ならどこにでも興味はあるものだが一行きたいという人は多かつたが、私と神宮寺さんしかその願いを果たすことはかなわなかつたので、やや後ろめたくはあつたが、そのぶん楽しまなくてはと変に意気込んでしまつた。艦長の自室を見させて貰つて昼食を頂いて帰つたが、これが素晴らしく樂しかつた。意気込む必要など最初からなかつた。

食事については、食レポ技術がないので報告を避けるが、わが艦の炊事長たる神宮寺さんが衝撃を受けるほどに美味しかつた。彼女は相当シヨツクだつたのか、帰りは殆ど無口を貫き、迅速に味噌の調達を終えると、運河で別飛側に出ていた大和に到着すると、颯爽と調理室に籠つてしまつた。

【お知らせ】 報告と世界観解説

ハイドウモ――！葉桜です！

投稿遅れます。申し訳ございません。

3話は書きあがりました。

そのため投稿したいところなのですが、実は4話で完全に詰まつてて、今以上に間隔があくかもしないので、その調整のために最新話長く投稿できてません。

申し訳ない限りです。

実は葉桜第三次受験戦争に駆り出されていて、それでこここの所なかなか執筆できていない日が続いています。

まあそんな時期に二次創作書いてんじゃねえぞという意見は尤もですが、実際いい気分転換になりますし良いんですよ。セーフセーフ。

でも実際プロットは出来上がっており、概ねどのような流れにするかも決めてあります。

なので、休載するつもりは更々ないことだけ報告いたします。
ええ、休載しません。

もしも楽しみにしてくださっている方がいらっしゃるならば、恐れ多く、また申し訳ないのですが、首を長くして待ってください。

頑張ります。

さて、報告しただけでは申し訳ないので、この「ハイスクール・フリート～北の海より愛をこめて～」について、世界設定を紹介したいと思います。

「ハイスクール・フリート～北の海より愛をこめて～」 概要

時代はテレビアニメ（以下『本編』）のほぼ裏にあたる、2016年4月から5月初頭です。

ですが、（本編の設定と相違が出た時の保険として）本編で展開される世界とは若干の世界線の変動があります。ダイバージェンスで言うと0・0001%くらい違います。

具体的には、『1940年代に改秋月型駆逐艦がマジで進水一步手前まで行きかけた』というあたりで本編世界とは分岐があります。本編との相違は、その影響です。全部。

とはいっても、原作レ〇プは趣味じゃないので、大筋で原作通りの展開をしますし、特に現在本編や公式で触れられている部分については極力矛盾なく執筆することを心掛けています。あくまで「原作の裏番組」「同時進行」「一方その頃」というコンセプトで進めていきます。

まあ、映画版とかで新たな情報に触れられちゃって、それがこの小説世界に矛盾するものだつたなら、いよいよダイバージェンスの違いが表れてきたなあつてかんじです。

《2019／1／2追記》

現状いわゆる架空艦は、改秋月型駆逐艦を流用した測量艦『野付型』のみです。

【日本の領土について】

こちらは1940年代に原作世界から分岐する前の話になるので、完全に推測になります。

日本の領土関連については、下のように捉えています。

1875年の樺太・千島交換条約は史実通り締結。

1894年の日清戦争には史実通り勝利。

- ・台湾、澎湖諸島、遼東半島を獲得するが、三国干渉により遼東半島を返還。
- ・1904年の日露戦争は、史実と大きく異なり、

- ・陸軍は史実以上の苦戦を強いられる。

- ・アメリカ介入のもと締結されたポーツマス条約では、

- ・日本の朝鮮半島における優越権を認める。

- ↓認められず。

- ・日露の軍隊は、鉄道警備隊を除き満州から撤退する。

↓合意。

- ・ロシアは樺太南部（北緯50度以南）を日本へ譲渡する。

↓認められず。

- ・ロシアは東清鉄道南満洲支線と、付属地の炭鉱の租借権を日本へ譲渡する。

↓認められず。

- ・ロシアは関東州の租借権を日本へ譲渡する。

↓認められず。

- ・ロシアは沿海州沿岸の漁業権を日本人に与える。

↓大筋で合意。

というようになつています。

陸では序盤から戦果が芳しくないままであり、海戦では確かに勝利したといって差し支えなかつたが、陸戦はほぼ敗北と言つても過言ではなかつた、と解釈します。そのため日比谷焼き討ちも起こらず、大陸の利権もほぼ放棄せざるを得ませんでした。

その後日本が沈降をはじめ、大きな戦争に参加することも、巻き込まれることもなかつたため、このまま現在に至ります。すなわち、

最北端 占守郡・阿頬度島 最北埼

最南端 台湾総督府・台湾島 鵝鑾鼻

→1931年より東京都沖ノ鳥島南小島（史実では1938年に海没したとされているが、坂本商会が頑張ったので東・北小島とともに護岸が設置されている）

最西端 台湾総督府・澎湖諸島 花嶼

↓1936年より同・新南群島 西鳥島

最東端 占守郡・占守島 小泊岬

（WW1がなかつたため当然南洋庁はない。そのため最南端と最西端は南洋庁ではない。）

つまり、概ね「史実日本十千島十台湾」です。

樺太も朝鮮半島も、日本領にはなっていません。

ただ、シベリア出兵と共産主義革命の影響で極東についてはロシア領ではない可能性もあるので、その辺については詳しく触れるつもりもありません。

台湾についても、あくまで設定として存在するのみで、登場予定はありません。

【沈降範囲について】

こちらも考察が必要です。

こちらについては、台湾はよくわかりませんが、北の沈降範囲としては、

・樺太 わずかに影響を受けるも特に変化なし

としています。

北方四島、および以北の各島についてですが、

・歯舞群島 残らず海没

・色丹島 沈降。大きく分けて6つの島に

・国後島 沈降。大きく分けて4つの島に

・択捉島 沈降。大きく分けて7つの島に

ここを境に、沈降は収まっています。

・得撫島、チリホイ島、プロトン島 沈降するも影響微弱

・新知島 影響確認できず

プロトン島については、最近まで沈降したのかしてないのかよく分かっていませんでした
が、ある人物主導のもと北海道海洋大の調査チームにより解明されています。

三話 推理して不穏な報告もらつて暗雲

【三話 推理して不穏な報告もらつて暗雲】

—— 択捉紗那島 別飛港 別飛第一埠頭 2016/4/7/1500

艦橋で一人、出港を待つている。

艦長は艦長室にいるし、まあぶつちやけ艦橋の真下なのだが、一人で艦橋にいるというのもなかなか珍しくて、他の艦橋要員も含め誰も呼ぶことはしない。

その日のうちに別飛をでる予定だつたため、艦長の実家でそこまで長くくつろぐことは出来なかつたが、艦長の部屋は思い出深かつた。部屋の一番目立つところに、大きなトロフィーが置いてあつて、よく見てみると、「最優秀賞 全国中学生自由研究大賞」と書かれていた。艦長こんな賞まで取つていたのか。変なところで局地的にマルチな才能を發揮するから、艦長は不思議なお方である。他にも壁には地図がそこら中に貼つてあつて、択捉列島や日本列島の現代地図はもちろん、大日本沿海輿地図だとか、帝国陸軍陸地測量部の地図だとか、そういう沈降前の地図まである。沈降前と沈降後の気候変化をあらわした地図もある。わけのわからないものもあつた。あれは海図だつたろうか？

艦長は地理ヲタだ。海図室長も兼ねており、艦長室は海図室でもある。地理の成績はもはや歴代の海洋学校測量科生徒の中でもトップレベルだ。既に大学まで行つて博士号を取つてゐるという噂まである。本人が話さないので知らないが。

実際、この艦長大卒説は案外的を射てゐるかも知れない、と私は思つてゐる。先ほどこの船に乗り込む直前に、二人で歩いていたところ、艦長の名前を呼ぶ人があつた。振り返ると見たところ50くらいの女性で、数人を連れていた。知合いですか、と聞く前に、艦長はこう言つていた。

「かつ、鎌谷教授!?なぜこんなところに…。お久しう振りです。：副長、君は船に戻つてくれ、すぐ行くから」

そう、“教授”と言つたのである。少なくとも大学教授を知合いに持つてゐるのだ。大学で学んでいれば、変なところで専門知識が多いのもわかる。ただ、なぜ大学から呉海洋女子（今は舞鶴だがそれは私達も同じだ）に来たのかが分からぬ。説明できないのだ。

そして、大卒であるほど優秀ならば艦長は多分大和の艦長ではなかつた。今頃呉の最新測量艦「野付」の艦長帽を頭に乗せていただろう。

入学間際に呉所属の測量艦が一隻失われ、しかし二クラス分新入生を集めていたから足りなくなつて、たまたま舞鶴に測量艦が余つていたからそつちに乗つたクラス、それ

が我々であり、大和である。成績が良ければ、より性能のいい方に乗せられていただろ
う。

そんなことを考えていると、しだいに艦橋要員が集まつてきて、出港準備完了の報告
が入つた。

我々は別飛を出発し、幌筵島へ向かつた。

ただ、次に紗那の土を踏むときまでに、私たちはとんでもない大事件の一端に巻き込
まれるということは、多分誰も予測できてはいなかつた。

——オホーツク海 計吐夷島西北西沖 2016／4／8／0400

艦長に叩き起こされた。

寝坊したか、と思うと、まだ四時であつた。

まだ四時ですよ、と文句を言うと、いいから来い、寝間着で構わないから何をおいて
も駆けつけろと言われた。

当直であつた艦長により早朝に叩き起こされたのは、艦橋要員全員だつた。

皆文句を言い目をこすりつとも集まると、艦長によつて横須賀女子海洋学校における
異変が報告された。

「先程、舞鶴からわたしに直接宛てて緊急の入電があつた」

「緊急の…ですか？」

「緊急の」

「よほどのことですか」

「大変なことだ」

「何でしようか。勿体ぶらずに教えてください」

「分かった。だが、衝撃的な事だから騒がないようにしてくれ」

「聞きましょう」

この時まで、私は眠いながらも叩き起されたことを恨んでいた。

「昨日4月7日10時ごろ、西之島新島沖で横須賀女子海洋学校の主催する予定であつた大規模演習において、集合時間に遅刻した同校所属の陽炎型航洋艦「晴風」が同校の改インディペンデンス級教員艦「さるしま」を砲撃、撃沈した。既にさるしまの乗員は救助されているが、晴風は逃走し、現在行方不明となつていて」

またこれとは別に、同演習に参加する予定だつた直教艦複数隻と連絡がつかなくなつた。消息不明艦は超大型直教艦「武藏」などで、詳細不明。演習は中止となつた」

艦橋に動搖が走つた。

眠気も吹つ飛んだ。

恨みも吹つ飛んだ。

「直教艦が教員艦を砲撃!?」

「反乱? ヤバくね?」

「そうなる。動機は不明だが…。」

日本近海を航行する全ての船舶に、晴風を含め行方不明となつてゐる艦船の目撃情報を探してゐる。発見し次第連絡を入れて欲しい、とのことだ。まあおそらく、行方不明となつてゐる船がそれ以外に無いかを調べてゐることも兼ねていてるだろうが…」

「今のところ横須賀以外の艦船の行方不明情報は上がつていないそしだが、対応措置として航行してゐる4校全ての直教艦について、原則直ちに母校へ帰投するよう指示が出てそうだ」

「じゃあここまで来て帰るんですか!?

「まさか。現在位置はと聞かれたのですでに計吐夷島西北西だと報告した。そうしたら、なら特別に任務続行を認めるとのことだつた。あちらも大和の無事が確認できればそれでいいらしく、横須賀船籍の航洋艦を発見した場合はただちに報告せよとのことだつた。」

「ということは任務継続、ということでおろしいんですね?」

「無論。クラスの皆には朝の定期報告で私から伝える。」

「これで話は切れた。」

そのあとは、寝ようと思っていたが、興奮冷めやらぬ故に寝られなかつた。

「それにもかかわらず私達の任務つてそれほど重要視されてるんですね。」

「ん」

艦長は通常モードに移つた。

「なんでそれを生徒にやらすのでしようね」

「人材不足、あともう卒業後の仕事が決められてる」

「まあそれはそうですよねー。私達の仕事なんてそれぐらいしかありませんもんねー。」

「だつたら今のうちに若いけど経験ある優秀な人材をつてことですか…」

「そう」

とは言つたが、艦長は最後にこう言つた。

「私は卒業しても、ブルマーにはならん。大学教授の椅子を狙つているからな」

…やはりこの艦長、大学卒業してゐるんじや…と思つたが、聞くかどうか逡巡していた間に、「詩歌、君の時間だ」と書記の国東さんに艦橋の担当を任せ、颯爽と艦長室へ戻つて行つた。

…

.....
.....

——パナマ共和国 ポルトベロ港 2016／4／8／0400 (JTC)

「……だそうです」

「そう。ここなら、直ちに問題はないわ。予定通り出発しましょう」

「了解。無寄港で目的地に出発します」

「ああ、それと」

「なんでしょう、艦長」

「電話を掛けなさい」

「誰にでしよう」

「もちろん、七島珠洲よ」

「了解しました大和にですね、手配します」

「そう、あの女に、ね」

四話 電話して電話して長電話

【四話 電話して電話して長電話】

——千島列島 計吐夷島北東沖 2016／4／8／1100
朝が終わった。

反乱の話は、にわかには信じられない。

非現実的すぎる、といえばそれまでだが、まるで小説を、いや映画を見ているような気分になる。

あのあと、艦長はおおよその事実を余すことなくクラスの全員に伝えた。

反応は多様だつたが、そこまで大きな混乱も起きず、私達は無事だから良いや、といった雰囲気のまま朝は終わった。

私も艦橋でのシフトは昼からで、特にあてもなく艦内を歩いていた。室内に戻つても大したことはないから、誰か他のヒマしてる人とおしゃべりでも洒落込もうかと思つたのだ。

そんなとき、電信・電測室の前を通りかかつた。ここは、平山茉莉と平山杏奈という双子の姉妹が担当している。ちなみに、二卵性なのであんまり似てない。

ドアが空いていたので覗いてみると、電信員である平山さん（双子のうち、妹の杏奈のほうだ）が私に気付いて、

「あ、ふくちよ。電話でくす」

「誰から？舞鶴？」

「いえ、『野付』ですよ」

「ああ：。分かつたわ。艦長に渡しとくわ。受話器は？」

「艦橋にキヤツチ回しどきまーす」

ありがとう、と言つて去つた。

艦橋に行くと艦長がいた。ものぐさな艦長だが、シフトは割とちゃんとやる。感心だ

が、その氣力をどうして他に回してくれないんだろうか…。

「やあ副長。まだシフトは先だろう？代わってくれるのか？」

「違います。艦長、電話です」

「誰から」

「…」

「言つてみろ、また舞鶴か？」

「…いや…」

「察した。貸せ」

艦長は電話を取ると、艦長が艦橋に持ちこんでいた小型テレビをいじりだした。するとすぐにテレビに、電話主の姿が映された。

『やあやあ、お珠洲。元気でしたかしら？』

「お前だと思つたよ、籠原」

『お元気そうで何よりつて感じね、お珠洲』

籠原双葉。

呉所属の同期にして測量艦「野付」の艦長だ。

同期なのにも関わらず籠原さん達が呉、私達が舞鶴所属なのは、元々呉にあつた2隻の測量艦のうち1隻（旧型の筑紫型筑紫）が事故で失われたからなのだが、詳しいところは聞かされていない。ただ、正しいかは分からぬが、筑紫と野付の艦長にそれぞれ内定していた七島珠洲と籠原双葉は、詳しい事情を聞かされて、筑紫の乗員であつた我々が舞鶴のオンボロ時代遅れ帆船に乗ることになつた、というのがウワサ好き大和乗員sの定説だ。

実際私もこれくらいしか選択肢がないし多分そうだろうと思つてゐるのだが、それでも不思議なことがある。籠原さんは、何かあるとすぐ電話をかけてくるのだ。それも艦長指定で、けつこうな頻度で、である。元々知り合いだつたわけではないらしいし、そもそも性格が違ひすぎる。見た目、というか容姿に関する理由でも恐らくないだろ

う。ベクトルこそ違えど、どちらも顔面醜悪とは言い難いからだ。艦長は150cmな
いからかやや童顔氣味なのに対し、籠原さんは大人びた整つた顔立ちをしている。

もしかしたら地理だけは勝てないから、籠原さんが艦長に嫉妬しているのかもしれない。籠原さんは成績優秀のオールラウンダーであるのに對し、艦長は地理しか脳がない。しかしこの地理が恐ろしく優秀で、この前の1月に行われたテストでも、籠原双葉の全科目1位という偉業をただ1科目阻んだのが、発展地理で史上初の満点を叩き出した七島珠洲だったのである。例年なら930点を取れれば学年首位は固いと言われるが、史上最高点987点の更新を期待されて望んだ二人は、一人は1000点満点の大記録を、もう一人は歴代5位となる965点となり、私達からすればハイレベルな、しかしして二人にしてみれば一方の圧勝に終わつたのだつた。

それが籠原さんに影を落としているのか、籠原さんは艦長に対しよくちよつかいをかけて來るのだ、と私は予想している。まあ、テストの前も電話してきていたが：「で？ わざわざ電話してきたってことは何かあるんだろう？」

『トーゼンでしょ。横須賀の船が行方不明になつたつて聞いたから、あなた達も行方不明になつてないかつて心配してあげたのよ』

『フンっ。まああなたがそう思うならそうなんじやない？』

「…それより、私も連絡をしようとしてたところだつたんだ。お陰で手間が省けたよ
『感謝なさい』

「籠原たちは無事だつたんだな」

あ、艦長スルーした。でも籠原さんも特に気にしてないまあいつものことなので仕方
無いのだが。

『勿論よ。今アタシ達がどこにいると思つてるの?』

「草葉の陰か?』

『勝手に殺さないでよ! ポルトベロよ、ポルトベロ』

(ポルトベロつてどこだ…)

割と聞いてて面白いので仕事が手につかない。そして後で調べなきやいけないことが
ができてしまった。

「そうかい。地球の反対側まで行つてどうするんだ? ああアレカ、マグロ漁船に乗せら
れたんだな」

『アタシはなにもしてないわよ! 野付艦長よ!』

「野付、とうとうマグロ漁船になつてしまつたのか?』

『なつてないわよ! 仮にも世界の名門呉女子の最新艦船よ、あなたのロートル帆船とは
違うのよ。舞鶴と違つて、呉は最新技術のデパートなのよ』

「私だつて異に入学予定だつたんだが…」

『あんたが選んだんでしょ』

「ぐ…」

『そもそもあなたは地理しか脳がないじゃない。野付艦長には私みたいに、なんでも出来る秀才が必要なのよ』

「地理だけは勝てないからって僻みに来たのかい？それに野付艦長が秀才なのは《結果》だろう」

『ツ…黙りなさいよ！悔しかつたらアタシに地理以外で勝つてみなさいよ』

『悔しいと思つて欲しければ地理で私に勝つこつたな』

(――――――――――――――――――――――――――――)

今…何か重要なことを聞いた気が…

聞いた気がしたのだが、直ぐに重要な話題に移つてしまつた。

「ところで――――――――――――――――――――――――――――――――――

『…何よ、まだ話続いてたじやない』

「今回のこれ、どう思う？」

『……』

一瞬で籠原さんが黙つた。今回の、この大事件には、彼女もやはり思うところがある

のだろう。

『……情弱なあなたたちは知らないだろうけど、6日の晩に、鳥島沖で砲撃を受けてる輸送船があるわ。詳しくは分からぬけど、それも事件のひとつとして見るべきでしょうね』

「……砲撃？ 雷撃ではなくて、か？」

『ええ、砲撃よ。それも、とびきりでかいやつらしいわ』

「おいおい、晴風にはせいぜい高角か14cmしかないはずだぞ』

『そうなのよ。多分これ、私達が第一報で抱く印象よりも深そうよ』

『そうだな。そもそも複数隻の失踪って言うこと 자체がおかしい』

『そうね。一隻失踪ならまだ分かるし、反乱だつて言うのも納得が行くけど、複数隻つて

⋮

「複数隻がどれくらいなのかにもよるがな。そして反乱っていうこと 자체も十分おかしい」

『どうして？』

『どうしてだろう？ 変ではないが…』

「入学式は6日だぞ」

『あつ…』

???

「出航が昼だとして、そして反乱があつたのが7日の朝だ。籠原の情報も組み合わせれば晩には反乱が始まつていたことになる。ちょっと早すぎやしないか？」

『……』

確かにそうだ。不自然ではある。

「そして、早すぎるというよりも、ほとんどの人間は入学式で会つたばかりのはずだ。それを、たつた半日と少しで統制して反乱に導くことが出来るのか？だとしたら、首謀者——艦長だと思うが——は相当の統率力とカリスマを持つてることになるぞ」

『そうね……でも……』

「ああ。早からう遅からうに関わりなく、晴風は教員艦を砲撃した」

『艦長が反乱を命令して船員に強いたとかは……ないわね。』

「ああ。少し無理がある」

「ダメだ。話についていけない。おとなしく割り込もう。

「あの、すみません……」

えつと……副長の高柳です。乱入してしまつて申し訳ないのですが、どうして無理があるんですか？艦長が命令して……というのなら、反乱が艦長個人の私的な考えだつたら、やけに反乱が早かつたのも説明がつきます」

『ああ、高柳…うしおさん、でしたね。ええと…、』

突然の割り込みにも、籠原さんは正しく反応してくれた。なんとなく、学年一位（測量科だけでの話だけど）の風格を感じる。

『ええ。その考えは間違つてないわよ。だけど…』

と、籠原さんは艦長を見遣つた。艦長に、質問をした人物の上司に、説明をさせようとしたのだと思う。

しかし艦長は顎で籠原さんに説明を促した。これを確認すると籠原さんはため息を少しついて、私に説明をしてくれた。

『人間つていうのは、そう簡単に誰かの言う通りにはならないわ。自分が嫌なことであれば、その人ができるだけ抵抗を試みるものよ。だから、艦長が命令して無理強いさせらるつていうのは難しいのよ。』

なぜなら、教員艦に攻撃して逃走するには、観測・セーフティーロックの開錠・操船・速度調整・照準・砲塔旋回その他が必要だから』
「あつ…」

『もう分かつた？？そう。そしてこれらは担当者が違う。誰か一人でも抵抗したら反乱は成立しないの。』

反乱が嫌ならば、見張りや電測員が距離の虚偽申告をすればいい。

そうでなくとも、操船手や機関がボイコットすれば船は動かない。

そうでなくとも、砲雷長や水雷長が命令しなければ弾は撃たれない。

そうでなくとも、照準や砲塔旋回担当が抵抗すれば当たらぬ。

そうでなくとも、副長の同意がなければそもそも開錠すらできない。

⋮そして反乱は、そのすべてが必要なのよ。更に、学校に反乱を起こすこと 자체がかなりリスク。失敗すれば、その後の生涯に大きな汚点を残すことになる。ブルマーへの道は当然絶たれるでしょうし、それ以外の仕事に就こうとしたつてケチがついてまるわ。

そんな一大事を、たかが直近24時間以内に会つたばかりの同年齢の艦長に命令されて仕方なくやつた⋮というのでは、合理的ではないわ。晴風に至つては入試でギリギリだつた人たちの集まりのはずだから、艦長に特別ほかの乗員を圧倒する才能があつたとは考えづらいわ。お珠洲の地理ならともかく。つまり、艦長の命令で強制的に⋮ではない可能性が高いのよ』

「じゃあ…」

そのあとは艦長がついだ。

「そういうことだ。艦長以下、船員ほぼ全員の意思による可能性が高い。輸送船への砲撃を考えれば反乱船は複数。そしてその全てで、おそらく事情は同じだ」

「で…ですが艦長、それは…」

「そうだ。明らかにおかしい」

『少なくとも2クラスの60名、多ければもっと。それだけの集団が、同じこと、それも
とんでもなく無謀なことを考える。そんなの明らかに合理的ではないわね。けれど…』
「今ある情報だけでは、それしか考えられないんだ」

「そんな…」

『つまり、情報が錯綜しているか、足りないか。お珠洲、あなたどつちだと思う?』

『どつちもだろうな。私は後者のほうが割合が多いと思うが』

『私もよ。相当足りてないわね、これは』

「具体的には? 意見を聞こう」

『従わざるを得ない命令だつた、とか』

「どこかに学生だけの独立国家を樹立する、とか」

『全ては横須賀の大芝居、とかもアリね』

「あるいは…」

『なに?』

「洗脳」

『…』

「なんだい、適當なことを言つたつもりはないが」

『バカバカしいわ』

「この状況では全てがバカバカしいがな」

『それもそうね。まあ、私はとりあえず任務を継続し、大西洋中央海嶺に行くわ。大和は、どこにいるか知らないけど、どうせ帰還命令じやない?』

『任務継続だよ。北千島の調査だ』

『あら、千島の調査。慣れてるんじゃない?』

『そうだな。：今の、皮肉としては三流だぞ』

『あなたに判断されても困るわ。ま、無事を祈るわ』

『そうか。カリブを北上するのであれば、せいぜいバミューダ・トライアングルには気を付けろよ』

『言われなくとも。じゃ。UW』

「UW」

そこまでで電話は切れた。UWとは「御安航を祈る」という意味である。

艦長は、そういえば私は休憩時間が、高柳任せた、と言つて部屋に戻つていった。

——千島列島 松輪島北沖 2016/4/8/1200

その後私は艦橋で、艦長の代わりにいくつか指示を出しながら、私はさつきまで繰り

広げられていた会話を思いだして、引っ掛けたことについて考えていた。

——「私だつて呉に入学予定だつたんだが……」——

——『あんたが選んだんでしょ』——

「ここ」の会話が、ずっと心に残っている。

「舞鶴行きは七島が選んだ」という趣旨。

筑紫乗員となる予定だつた我々は強制的に大和に載せられたのだという噂だつたが、「選んだ」という表現は、少し変だ。

まだ変なところはあつたような気もするが、思い出せない。どちらにせよ、噂ではなく、真実を知るためには、どうやら情報が錯綜している以上に、足りなさすぎるようだつた。

4・5話 ?各海洋女子校所属 測量艦リスト

『筑紫型 測量支援教育艦』

概要	全速出航	全幅	全長	基準排水量	1400t
	続航距離	10.60m	84.00m		
	装備状況	20kt	5700hp		
	同型艦なし	12cm連装高角砲2基	25mm連装機銃2基		
		J B N S — K — 2 4 0 3	吳		

設計時から測量艦として設計されたものとしては、我が国最初の艦船。

同型艦が計画されていたが、改良した改筑紫型として就役したため、同型艦はない。
一番艦筑紫は海洋女子開校以来より、長らく呉に在籍しており、老朽化が叫ばれている。

現在、最新鋭の野付型二番艦との入れ替えることが予定されている。

追記（2015/3/31）

2015年3月12日、本級一番艦『筑紫』は、瀬戸内海を試験航行中に座礁、沈没した。

翌4月に入学し本艦に乗船予定であった呉女子海洋学校測量科第二クラスは、協議の末、舞鶴女子海洋学校所属艦に乗船することになった。

《改筑紫型 測量支援教育艦》

・ 基準排水量	2300t
・ 全 長	90.00 m
・ 全 幅	11.50 m
・ 速 力	22 kt
・ 航 続 距 離	7000 hp 17 kt 8000 NM

航	速	全	基準排水量
出	力	幅	長
続	離	0	136.20m (水線長134.00m)
		35.0	
		k t	
18 k t	70 0 0 0	0 s h p	
80 0 0 0			N M

『野付型 大型測量支援教育艦』

前級の測量艦としての問題点を改善するために計画された。三保型とも呼称される。居住性を含めて大幅な改善がなされ、評価は総じて高い。四番艦以降の建造も計画されているが、更なる改良を加えた新艦級となる可能性もある。

兵装	12cm連装高角砲 3基
配備状況	一番艦三保 J B N S — Y — 2 4 0 1 横須賀
二番艦氣比	J B N S — M — 2 4 0 2 舞鶴
三番艦唐津	J B N S — S — 2 4 0 1 佐世保

・ 兵 装 65口径10cm連装高角砲 2基、25mm連装機銃 2基
 ・ 配 備 状 況 一番艦野付 J B N S — K — 2 4 0 4 吳
 ・ 概 要 二番艦??? ???? — ? — ???? ? (現在、実質???)

現在は横須賀女子海洋学校に配備されている秋月型教育艦を改良する目的で設計されていた「改秋月型」をベースに、測量艦として再設計した艦級。建造中止となつた改秋月型一番艦「北風」の船体を一部転用したものである。

そのため、そのカタログスペックのほとんどは改秋月型と同値であるが、改秋月型ほどの兵装を必要としなかつたため大幅に撤去した。そのために軽くなつた分は二号二型改四ス一バーへテロダイン式受信機付電波探信儀や三式水中音波探信儀、零式水中聴音機の多数装備にまわすよつて高性能化を実現した。そのため、ただでさえベースが並の駆逐艦を凌ぐものだつたことも相まつて単なる測量艦としてはかなりのオーバースペックの艦になつてゐる。しかし、これを逆手に取り敵地や危険水域内の强行迅速測量を想定して運用されている。

現在は一番艦が呉女子海洋学校に配備されており、二番艦は????????????である。

《大和型 測量支援教育艦》

・ 基準排水量	1 9 9 0 t
・ 全 長	6 5 . 3 7 m
・ 全 幅	1 1 . 6 7 m
・ 速 度	$2 0 \text{ k t} + \alpha$
・ 出 力	$7 0 0 0 \text{ h p}$
・ 航 続	距 離 風次第（無風計算 $1 6 \text{ k t} 8 5 0 0 \text{ N M}$ ）
・ 兵 装	ボフオース L 7 0 2 基
・ 配 備	J B N S — M — 2 4 0 3
・ 概 要	舞鶴

元は日露戦争にも従軍した葛城型スループ二番艦である。日露戦争後、三番艦「武藏」とともに測量艦へ改修された。

日本海に存在する大和堆や、オホーツク海に存在する北見大和堆は発見艦である本艦に因んだものである。特に日本海の大和堆については、それまで通説であつた日本海は一様に深い海だという学説を打ち破つたことで広く知られている。

その後1940年代に退役し長らく行方不明となつていたが、2000年代に再発見され、舞鶴女子海洋学校で大規模改修を受け、世界的にも数が少なくなつてきる汽帆兼用艦の学生艦として2021年度より運用される予定である。

2013年度末に改修を終えた本艦は、武装・機関等を学生艦として運用可能なレベルに改修したのみならず、帆船航行を阻害しないよう小規模ながらも艦橋を増設し、その性能は筑紫型を凌ぐほどになつてゐる。

追記（2015／3／31）

2015年3月12日、筑紫型一番艦『筑紫』は、瀬戸内海を試験航行中に座礁、沈没した。

翌4月に入学し事故艦に乗船予定であつた呉女子海洋学校測量科第二クラスは、協議の末、舞鶴女子海洋学校所属の本艦に乗船することとなり、運用開始が本来の予定であつた2021年から大幅に前倒しされることになつた。

以上

五話 会議してぐだりにぐだつて柏原

—千島列島 峴筵島沖

2016/4/9/0530

「では定例会を始めるぞ」

「こんちやーっす！」

自分、大和炊事長、神宮寺抄つス！今日は週に一度の、大和の重役の会議の日なんスよ！いつつもグダグダに終わるんスが、今日はどうつスかね？なんか横須賀の方で事件があつたらしいんで、それのことについて追加情報が出るんじやないつスかね。

改めて参加者を見渡してみると、

七島艦長兼海図室長・常陸航海長・国東書記の艦橋組——副長は艦橋で仕事をしてのだけで決してハブられてる訳じやないつスよ——高遠測量長、神若砲雷長、柿崎機関長、萩原主計長、朝田衛生長、那須野操帆長、そしてこの神宮寺。計10人つス。なかなかのボリューミイな感じなんスよ。

「お、司会の艦長さんが何か言い出し始めそうつスね？」

「さあ、いつものごとく早朝に集まつていただき感謝する。

まずは早速、昨日全員に伝えた例の反乱事件についてだ」

この一言で、雰囲気が一気にシンとしたつス。やつぱりみんなが気になる話ではあるつスから、新しい情報を得たくて仕方がないんスよ。後で自分の持ち場の人に話したいっていうのもあるだろうつスけどね。

「昨日の朝報告した段階まででは、晴風が反乱を起こして失踪、しかし他にも失踪船がいるらしい、という話だつた。それから一日経つて、新しい情報も入つてきた。ここで伝えておく。なかなかに刺激的な知らせだから心して聞いてくれ」

あつ、柿崎機関長がメモと取り始めたつス。まあ機関科は噂話大好きつスからね：仕方ないつスね：

「失踪船の数が判明した。いくつだと思う？」

うん、早速グダグダになりそうな気がするつスね：。あ、ここからは台本形式にするつスね。

七島 「どう思う、神宮寺」

神宮寺 「5000兆隻欲しいつス！大量失踪で圧倒的成長！」

朝田（衛生長）「神宮寺黙つて。常識でものを考えて。そして圧倒的失墜の方が正し

い」

萩原（主計長）「現実的には3隻くらいじゃないではないですか」

神若（砲雷長）「でも艦長の口ぶりからするともつと多そうですよ」

神宮寺「じゃあ現実的な数値に直すつスか…。810隻くらいとかどうつスか?」

那須野（操帆長）「神宮寺さん、汚いですよ…」

神宮寺「801隻でもいいつスよ?むしろウエルカムつス」

柿崎（機関長）「それもダメじやないかな…」

七島「7隻だ」

艦橋組以外の全員「うわー…」

神宮寺「少ないつスね…」

朝田「黙れ神宮寺…」

那須野「コレ多いの?神若さん」

神若「そそこそこ多いですよ」

萩原「いやそことかじやなく多いのですからね!?とんでもないのですよ!」

常陸（航海長）「もしもの話、もつと増えるっぽくてー」

柿崎「私達は失踪しなくて良かつたよ…」

神宮寺「不思議な言い方つスね」

七島「それで、だ。我々にも帰還命令が出ていたらしいが、舞鶴直々の指揮で任務継続となつたのは伝えた通りなんだが——」

神宮寺「ちよつとミス朝田!今神宮寺けつこうまともなこと言つたつスよ!いちいち

突つかかって来るなつス！」

朝田「だから黙れって：お前の声だけで頭痛が起るんだって」

神宮寺「だつたら頭痛薬でも飲めばいいつス！あんた衛生長でしょーが！」

朝田「黙れ、貴重な薬をこんなことに使いたくないんだって」

萩原「ま、まあまあ。お互にここは納めたほうがいいのですよ？会議中なのですから…」

神宮寺「黙るつス！これは二人の問題つス！」

朝田「黙れ萩原、これは二人の問題なんだつてば」

萩原「酷いのです！」

常陸「ここまでいつもの流れすぎて笑える」

柿崎「全員が全員学習しないからね…」

神若「いつもこうなりますよね…」

七島「緊急時はバツチりみんなやつてくれるんだがな…」

神宮寺「ちよつと！なにまとめにかかってるつスか!?」

七島「後でやれ。今日は解散だ。もう柏原が近いぞ。全員測量だ。高遠、頼む」

高遠（測量長）「…」

七島「高遠？」

高遠 「… z z z」

七島 「寝てるよこいつ」

柿崎 「まあいつものことだよね…」

神若 「これだけうるさいのによく寝られますよね」

七島 「よし、高遠を起こして準備せろ。到着したら連絡を入れろと舞鶴に口酸つぱく言われているから時間はあるが…。では、全員解散！」

——幌筵島 柏原 2016／4／9／0700

「…もしもし、秋峰先生ですか？七島です。ただいま柏原に到着しました。：はい、異状ありません。：他にですか？ええと…野付から電話が掛かってきましたが、あちらも異状無いようでした。」

艦長が舞鶴に電話をしている。艦長は珍しく丁寧語だ。まあ担任の先生と会話をしているのだから当たり前と言えば当たり前だが、普段のものぐさで突つ懃貪な態度からすれば私達にもその丁寧さを分けてくれと言いたくなる。人によつて態度を変えてはいけないと、学校で教わりはしなかつたのだろうか。

そのあとしばらくして電話が切られたので皮肉混じりにそんなことを言うと、

「人によつて態度を変えてはいけないのは小学校で習つた。だがそれはあくまでその人達が対等な関係にある場合だろ。お前と秋峰先生とでは私から見た立場が違う。態度が変わるのは当然だろう」

と返された。至つて正論だつたが、ふと思い立つて、こんな切り返しをしてみた。

「この前の鎌ヶ谷教授? とやらは、艦長から見たら?」

「ああ、鎌ヶ谷教授は…そうだな…」

さあ艦長、先生だとかボロを出しちやつて大卒説を証明させてください――

「私の志す学問の第一人者なんだ。尊敬しているよ」

チクショウ! だがまだだ…

「どうやつて知り合つたんですか?」

さあ大学とかボロを出しちやつて大卒説を証明させて――

「友人の紹介だよ」

チクショウ! い、いや…

「友人というと、その方も教授なんですか?」

「ああ、教授ではないが大学で研究をしているよ」

かかつた!

「その方とはどこで?」

大学で研究をしてるんだから大学で知り合つたに決まつて——

「研究論文大賞の授賞式：だつたかな」

チクショウ！

…諦めよう、武器が足りない。

「そなんですか…」

「ああ。…思えばあの賞は人生の転換点だつたな」

うわ！自分から釣られに来たぞ！神様ありがとうございます！

「どんなんことがあつたんですか？」

極めて慎重に、努めて冷静に：

「あの賞を受賞した直後にな」

大学に入つたんですか——とは言わずに喉で押さえておく。

「中学校に行かなくなつたんだよなあ、今思えば中学校でもつと学習しておくべきだつた」

ええ…重い雰囲気出してくるなよ…

待てよ…コレ大卒じゃなくて単純に不登校にでもなつてしまつただけではないか…

…ええい、聞くなら今だ！

？

「艦長！」

「なんだい」

「その…学生論文大賞を受賞したあと、艦長に何があつたんですか？」

「そうだ、そう言えば言つてなかつたか？」

「聞いてません」

「そうか…そうだな…」

艦長は少し俯いて言つた。

「出来れば言いたくないな…」

「そう…なんですか」

「ああ。どうせいつかは皆知ることになるとは思うが…でも、今は言いたくないし、知つて欲しいとも思わないんだ…」

「そうか…」

「そうなのか…」

駄目だ、こう言われてしまつてはこれ以上の詮索は出来ない。

「艦長以外でその事を知つている人はいるんですか？」

「この船では、詩歌が部分的に知つているだけだ。それと籠原も知つている

「国東さんが…どうしてですか？」

「ここに来る前に何度か会つたことがあるんだ」

「そうなんですか…。…あれ？それだけつてことは、国東さんもホンの少ししか？」

「ああ、そうだ。…でも副長、君が知りたいであろう情報はそれで十分だと思うよ。…そ
うだ副長、私からも聞いてみたいことがあるんだが」

「…へ？何でしようか？」

「君がさつきから質問してくるように、どうやら艦内で私の入学前についての噂が広
がっているらしいな」

「はい、艦長地理のことなら何でも知つてますし…」

「知つていることしか知らないね。そして7割は小学校時代に身に付けた知識さ。それ
で質問なんだが…」

「はい」

「あんまり聞いていいか、こういうことに慣れていないが分からぬが…」

「??」

「それらの説のなかで一番突拍子もないのと一番それっぽいの、教えてくれ」

「…なんだ、そんなことですか」

「いいだろ？頼む、聞いてみたい」

「いいですよ。私が聞いた限りですと…」

「一番突拍子もないのは、『飛べる』です」

「…ははっ。なんじやそりや。鳥かね私は」

「流石にあり得ませんよね。すぐにテレポート派が優勢になりました」

「うん、テレポートも出来ないからな」

「逆に一番それっぽいのは…何でしようね、天才だから、ですかね」

「合ってる」

「自分で言いますかそれ」

「当たり前だろう。私は天才だからな」

「そうなんですか…」

「そうだ。私の噂をするのは構わないが、どうか超能力者のセンは消しておいてくれよ」

「ふふ。分かりました。では、行きますか」

「ああ、行こう。

測量は時間が掛かる。ひよつとしたら終わる頃には全部が解決しているかもしけない

「…あ、そうだ。艦長室に寄らせてくれた。

「…あ、そうだ。艦長室に寄らせてくれ」

「ああ、いいですよ。待つてます」

と言つて、艦長室に艦長は行つた。

——艦長室は、この狭い大和のなかで唯一の個人スペースである。もつとも海図室を兼ねているので個人スペースかどうかは微妙だが、個室を持つてるのはこの船では艦長だけだ。艦長室は艦橋のほぼ真下にあり、有事の際にも艦長が真つ先に駆けつけられるようになつてゐる。

艦長室には艦長の私物が全て置いてある。中を見たことは数度、それもホンの少しだけだつたため、中がどうなつてゐるかは分からぬ。それと、この船の艦橋の設置自体がかなり新しいからか、艦長室にはトイレとユニットバスが設置されている。艦長は地味にお風呂が好きらしく、非番の夜はよく入つてゐるが、伝声管からたまに鼻歌が漏れたりすることからもわかる。鼻歌というとすごく艦長らしくないが、その鼻歌も演歌だつたり軍歌だつたりチヨイスが微妙なことが多いのでやはり艦長である。

それよりも気になるのは、艦長の噂である。艦長室にはきっと、艦長の出自に関する秘密が隠されているに違ひない、とはずつと思つてゐるが、誰も調べようとするものはいない。どうせ簡単には理解できない書類しか入つていないからだ。先程の会話で、艦長に探りをいれることは叶わなくなつたが、だからといって眞実がわかつた訳でもないし、既存の噂を収束させることが出来る訳でもなかつた。

「…艦長室か…」

と呟くと、噂をすればなんとやら、その艦長室から艦長が地図を持って出てきた。

「待たせたな。幌筵海峡周辺の海図だ。本当は幌筵島南部だつたはずなのだが、この前の事件によつてちよつと変わることになつたんだ」

「そうだつたんですか…」

「柏原から見える位置にしたいんだと。まあ同じ海の上だからな、突然目の前に晴風が現れてもなんらおかしくはない。そんなことになつたら面倒だからな」

「撃ち合い…ですか」

「まさか。あつちはモトが戦闘艦だ。一方的に虐殺されるのがオチだろうさ」

「それもそうですね…」

艦長が歩き出すと、私はもうドアの閉まつた艦長室にそつと目をやり、すぐにはまた目線を戻して艦長の隣に並んだ。

私たちは艦長室に背を向け、タラップの方へ向かう。これから陸に上がるのだ。たつた2日ぶりだが、異様に長く感じた。

六話 不法侵入と学歴開示祭り—不法侵入編—

—柏原港 大和艦内 2016／4／15／2028

最近厄介事が増えた。

そんな気がしてならない。

その最たる理由は間違いなく晴風失踪事件だろう。…おつと、もう晴風の発見報告は届いているから、例の集団失踪事件…とでもしようか。

元々私は厄介事や面倒事が嫌いだ。

艦長特権を駆使し、同じ場所に留まつて報告を送らせたことが何度あつただろうか？仕事が増えるのが何より嫌だ。

尤も、自分の好きなことであれば仕事がいくら増えようと飛び付くが、世の中そんなに甘くはない。特にこの、学生艦の艦長という職は。

だが、非常に残念なことに、私の艦長として背負う仕事の殆どは、投げ出してはいけないものだ。投げ出していいもの、等閑にしてもいいものであれば、喜んで放棄するか、ヒマしてるヤツに慎んで進呈したいところだが、生憎そうではない。

しかし、…まあまつたく嫌ではないといえばウソになるが、このテの艦長としての責

任を伴うような仕事については、私はきちんとこなす。始末書を書くのが死ぬほど嫌だという理由も無くはないが、やはり、そこはテキトーにしてはいけないだろ、というラインは私も一応は弁えているつもりなのだ。

尤も、これがあまり周りに伝わらないというのは、艦長としてはなかなかに致命的だ。日頃から何でもテキトーにやっていると思われてしまう。まあある意味では狙つてのものだし、そう思われる分には特に文句があるわけでもないのだが、テキトーに物事を進めていると、兎に角変な印象を持たれる。

艦内には私がテレポーターであるという噂があるようだが、これもやはり、どれだけ私が船員に理解されていないかという事実の現れではある。勿論、全てを理解してもらおうとは更々思わないし別に良いのだが、この謎チックな都市伝説とも言うべきそれは、私の前に突然実体として姿を表すことがある。

例えれば、今だ。

艦長室に戻ると、

ある人物が、

私の机を引っ搔き回していた。

海図室もある私の部屋だが、私は停泊中の勝手な立ち入りを禁止している。海図なんて停泊中にこれほど要らないものはない。なのに海図室に入る必要があるか？ない。

では、目の前にいる人物は何がしたいか？

海図室兼艦長室である部屋に人が入った。、そして海図室としての利用は考えにくい。となると、海図室ではなく艦長室に用があつたと考へた方がいい。それは今日の前で「やつちまつた」的な表情でこちらを見ている人物が、私の机を漁つてることからも明らかだ。

「…説明してもらおうか」

「…」

その女は口を開けたままであつた。

「どう言うことだ、高柳…高柳うしお」

「…あの…か、艦長…これは…」

高柳…副長は、ポカンとしている。

最近、厄介事が増えた。

そんな気がしてならない。

まずは一旦落ち着いて、こうなつた経緯を思い出すことにしよう。

——回想……幌筵海峡上 2016／4／15／1135

【艦長さん、全工程終了したよ】

その報告を聞いたのは、私が甲板に上がつて、皆が測量しているなかで優雅に釣りと洒落込もうかと言つたのを副長に止められて拗ねていた時であった。報告をしてきたのは、測量長ではなく、その補佐をする測量専門員の大雪。名残だつた。

大雪は、測量専科のなかで最も明るい性格をしている。その苗字を表現したかのようなやや白みのかかつた肌と、それとコントラストをとるような黒い髪は、私からしても、見るからにケバケバした——というと流石に失礼な気がするのでその性格的に（もつと失礼になつた）——常陸にさえも、美人だと言わしめる域だ。

ああ、ありがとう。お疲れ様、と言つて艦橋に戻り、柏原に帰ろうとした。艦橋にはもうすでに人が揃つっていて、帰港まではそれほど時間はかからなかつた。

帰港して、下船する前に一旦ふと思ひ立つて艦長室に立ち寄ると、開けた瞬間に、中がいつもと違うのに気づいた。具体的には海図が散乱している。綺麗な部屋だつたのに。

：おつと、勘違いされでは困るが、確かに私はものぐさだが部屋は綺麗に保つ方だ。床でごろごろしたいという希望によるものだ。なので海図が床に5枚ほど散らばつてゐる事は、はつきり言つて異様だつたのだ。

しかし、この時は誰かが意図的にひっくり返したとは思わなかつた。とかく船は搖れるからなんにでも固定をしなくてはならない。しかし、おそらく海図室として誰かが私

の部屋を訪れて海図を返却する際、海図の固定を忘れたことが原因だろう。よほど焦つていたのだろうか。

海図をサッと片付けて机に座ると、なんとなく机の棚の資料の順番がこの前見たときと違うような気がした。あれ、変だな、とは思ったものの、自前のには棚の資料を見返すのはよくあることで、そのときにまあ正しく戻さなかつたのだろうな、あるいは風呂の入りすぎでのぼせて机をいじつて、記憶ごと無くしてしまつたのだろうと思つた。

——回想：柏原港 大和艦内 2016/4/15/1920

「…ええ、それはありがたいです」

『じゃあ、そちらからも連絡を入れておけ』

「わかりました。では」

舞鶴との電話を切つて、ふう、と一息ついた。

私達が測量に励んでいる間に、晴風が無事保護されたという知らせは入つていたのだが、今回の電話では新たに、失踪艦が12隻になつたことが知らされた。晴風が見つかってなおそれだというのだから、8日の報告——もう一週間も前の出来事になる——から6隻新たに失踪した（少なくともそう判明した）ことになる。

また随分と謎が深まつてしまつた。前に籠原と電話したときは色々な冗談が出たが、少し方向性を変えなければならなくなる。

例えば、「従わざるを得ない命令だつた」や、「洗脳された」とかであれば、一齊に被害が出るはずである。追つて6隻も新たに追加されることなんて考えにくい。最初から大規模な被害を出すつもりであれば、第一波のみでよい。第二波を引き起こす前に正常な船は横須賀に逃げ帰ることができてしまうからだ。そのリスクを考えると何回にも分けて行動を起こすことは効率的ではない。

逆に「単純に学生が反乱を起こした」「学生のみの国家を樹立する」というのは、にわかにそれっぽさを増してきたことになる。新規の失踪艦は、晴風らの反乱に賛同したから失踪したというのは、まあまあ納得の行く論理だからだ。しかし、これも考えにくいというのは既に籠原と結論を出しているし、晴風が極めて平穏無事に「保護」されたことも引っ掛かる。本当に反乱したのであれば保護という言葉を使うだろうか？鎮圧という方が考えやすいだろう。投降したとでもいうのならば保護という言葉でも筋は通るが、反乱の先陣を切り、反乱勢力の中で現在（報告のあるものとしては）唯一上司たる教員に攻撃している晴風がそう簡単に投稿するだろうか？

そう言えば俄に私のなかで急上昇している見解がある。

ウイルス、あるいはそのような、集団感染を引き起こすような病氣だ。

何故そんなに唐突にか、というと、柏原の町に行つた時に見つけた本屋に、全人類の半分がゾンビになつて人間に反乱を起こす小説を見つけたからである。私はこのようなジャンルの小説は滅多に読んだりしないのだが、それでもまたまには趣向を変えてみるのもいいだろうと思つて、思わずその場で購入してしまつた。それを、まだはじめの方しか読んでいないのだが、その本のせいで、なんとなく例の集団反乱もゾンビウイルスのせいなのではないか…と思つたのだ。ゾンビは得てして人間に反乱を起こすものである。

…まあ勿論痛い妄想だというのは百も承知だ。晴風が保護された事について何らの理論的説明が与えられない。これ以上は何も言わないのでおこう。

話がそれたが、どうやら舞鶴は、私達が測量に励んでいる間に帰り道の安全を図つてくれたようだ。函館までの短い期間ではあるが、海上安全整備局紗那出張所の人達が護衛についてくれるのだという。合流地点は千島列島中部の島・羅処和島の東の沖合。そこから紗那までと、紗那から函館まで我々をインディペンデンス級の艦船が同行するらしい。嬉しいことだ。勝手に決められた事について文句を言う筋合いはない。安全が保証されたのだから、享受しておくべきだろう。

「もしもし、紗那出張所ですか？ええと、舞鶴女子海洋学校所属の…ああ、はいそうです、大和です。艦長の七島珠洲と言います。よろしくお願ひします…」

このあと、コミュ力を少しだけ消費して、16日の6時に我々は柏原を発ち、21時に羅処和島沖で合流することで合意、確認した。

私は受話器を置いて、乗組員に通達をしてから、例の小説の続きを楽しみにしつつ、艦長室に向かつたのである。

艦長室に戻ると、高柳が私の部屋を机を物色していた。

文章だと以外にも表現が淡白になつてしまふが、目の前の光景はなかなかに衝撃的である。別に裸な訳でも、ベネチアンマスクをつけている訳でも、メキシカンライスを食べている訳でもないのだが、副長がこつちを「あつ終わつたやつちまつた」的な目線であんぐりとしている様は、むしろ滑稽さすら感じるものであつた。

「…説明してくれ」

「…」

答えない。

だが、予測はできていた。

「…私がこの学校に入学する前の事について知りたかつた」

「…!!」

「…もつと具体的に言つてやろうか？私が大卒かどうか知りたかつたんだろう」

「……」

「図星か？」

「…はい…」

「…これ以上は無理か…」
やつぱりな。そうだと思った。

溜息をついて、そう呟いた。

決して隠そとしていた訳ではない。
決して知られたくなかつた訳でもない。

知つてほしくなかつたのだ。

艦長として、この船を統括するものとして、この船に火種を持ち込むのは極力避けてきた。今回の事は立派な火種になりうる。艦内が不穏な空気に支配されるのは、艦長としてこれほど心苦しいことはない。

過去にずかずかと踏み込まれる事は構わないが、踏み入った事を後悔させたくもなかつた。

でも、どうやら知りたいらしい。
みんな。

人の過去にずかずかと踏み込みたいらしい。
楽しいかよ、そんなの。

遊びじやねーんだぞ、それ。

「…知りたいというなら、構わん」

「…艦長…」

もういいのだ。

「副長」

「…はい」

「私の事を知りたいのは、お前だけか」

「…」

「噂がある以上、皆知りたいと見ていいんだな?」

「…はい」

「そうか」

「そうか。知る権利か。厄介な権利だ。」

「艦長室の伝声管を使つて、全員に伝える。」

「皆聞いてくれ。私だ、艦長だ。」

「ええと…、日頃から艦内に蔓延つている、私の中学入学前の話について、どうやら話

さなければならぬ時が来たらしい。

突然ですまないが、知りたい者は、約30分後、つまり2100に教室に集まってくれ。知りたい者だけでいい。強制はしない」

それだけ伝えて、まだ気まずそうな顔をしている副長の前に立つた。

「艦長…すみません…私のせいです…」

「今は聞きたくない。準備があるんだ。君も戻れ。侵入については不問だ」

「その…私は…」

まだ何か言いたげだった。でも、それもどうせ…

「これが一回目じやないんです。」

ハモつた。

「…だろ？」

「…」

「それについても不問だ。さあ、戻りたまえ」

「艦長…本当にごめんなさい…」

「いいんだ」

それだけ言つて、私はもう何も言わなかつた。

副長も、終始申し訳なさそうにして出ていった。

「さて、と…どうしたものか…」

話さなければならなくなってしまった。

やはり不和を招かぬように、

「当たり障りのない…こと…を…あれ」

そこまで思考が一度止まつた。

「そうか…、私…は…、」

私は、艦長としてどうするかしか考えられていないのではないか。

相手は同級生なのに、下に見ていたいだろうか。

同級生と同級生らしい会話を、もう何年していないだろう。

あのアイドルが、そのケーキ屋が、そんな会話をもうずつとしていない。

艦の為と言つては俗を避け。

艦長だからと言つては俗を忌み。

みんなを思つてと言つてはみんなを抑圧し。

同級生でありながら、同級生であろうとしない。

そんなことばかりなのかもしれない。

私は。

「…馬鹿だ」

やつぱり、話さなければいけないらしい。
「…バカタレ」

自分を少しだけ罵り、準備を始めた。
小説を読むのは、後になりそうだつた。

七話 不法侵入と学歴開示祭り——学歴開示祭り編——

——柏原港 大和艦内 教室 2016／4／15／2100

いつけない！遅刻遅刻！！

わたし、島村悠希菜——この船で第一マストの見張をしているの（＊、艸、）でもある日艦長が「私の過去を知りたいやつは教室へ来い」とか言い出してもう大変！みんな「どうでもいい」とか言つてるけど私はすつごい気になる……私いつたいどうしたらいいの？次回「全員出席」お楽しみに（＊、艸、）

：なんてことを考えつつ、教室の机に座っています。実際にここまで流れはおおむね上記の通りだから、ちょっと面白い。

教室は騒がしい。まだ「やっぱり飛べる宣言では…？」みたいな事前予測が飛び交つていて。

艦長がどういう風の吹きまわしでいきなり学歴開示をしようと思つたのかは分からないけれど、でもここに全員が集まつてることからもわかるように、やはり全員が「気になる事柄」ではあつたみたいで。

：でも私は、おそらく期待していることの本命はみんなのそれとは違う。ずっと感じ

てた違和感なんだけど…

「…なんだ、全員集まつたのか」

艦長がやつて來た。

艦長は、なにやら紙袋をひとつ携えて、そしてやや緊張した顔で、教卓から私たちを見ていた。そして、

「…黙つても始まらないから、始めるぞ」と言つた。教室はすっかり静かになつっていた。

「…私については、色々な噂が飛び交つてゐるらしいが、実際のところは…この紙袋の中に全て詰まつてゐる。まずは…そうだな、これか？」

そう言つて取り出したのは、ひとつの中の書類。

文字がびつしり書き込まれていて——しかも英語——、席が後ろの方の私には読めなかつたけれど、前方の席の人が読んでみたらしく、前方からほどよめきが上がつていた。艦長はそれに答えたらしく、

「ああ、博士号の書類だ。おおよそこう書いてある。『海洋地理学博士　七島珠洲』と後ろの方も、ざわざわしあげはじめる。

艦長が博士…

マジか…

やべえよやべえよ…

そうしてドヨツている私達におかまいなく、艦長は続けた。

「そして…おおよそ皆が知りたいのはこちらだろう」

と言つて、それを高く掲げた。

それは私にも読むことができた。

「卒業証書 七島珠洲 ————— 北海道海洋大学」

大卒だつた…??

大卒だつた…!!

またひとしきりどよめいた後、自然と教室中の視線が艦長に向いた。「どういうことか説明してください」——と、そう言いたげに。

それを知つてか知らずか、艦長は語り始めた。

「…経緯を説明しよう。」

これは言つたことがある人もいるかもしれないが：私は中一で『学生論文大賞』の最優秀賞を受賞したんだ。地元の海底地形の調査だつたんだが。…それがどういうわけか、その筋の学者にも知られ、どういう運命の悪戯か、そこでも高い評価を得てしまつたんだ。海洋学界隈に、七島珠洲の名は広く知れ渡つたらしい。謎の天才中学生、海洋

研究界期待の星として

艦長はそこで一拍置いて、また続ける。

教室は静かだつた。

「そうしたらある日、北海道海洋大学から手紙が来た。何かと思ったら、中学高校を全部スツ飛ばして、大学に入らないか——と、おおよそでそんなことが書かれていた。

中学は義務教育だ。そんなことが可能なのかと思つたが案外可能らしく、私が希望したこともあり入学はすぐに決まつた。形体的には転入が近いかもしない。：まあ後で知つたことだが、北洋大は若い才能を活かす事に力を入れてゐるらしく、飛び級や優秀な高校生の：引き抜き、とでも言うのか？言い方は悪いかもしぬないが：まあその辺は既に多くの前例があつたらしい。流石に中学生、となると例がなかつたようだが。

：ともあれ、私は大学に入った。確か9月の末だつたから中学生活は6ヶ月もなかつた

「私はそれ以来、地理学の勉強ばかりやつた。それで大学に入ったのだし、周囲もそれを期待していたから、当然と言えば当然だ。そうして期待になんとか答え続け、大学側も若い人材の育成推進という点で私に何らかの思惑を掛けていたらしく、私は飛び級に次ぐ飛び級。書いた論文も好評に次ぐ好評。知名度目当てに私との共同研究を提案してくれる大人もいた。：おつと、自慢するつもりはないんだ。今はただ事実のみを述べる

よ。

：まあ、色々あつて。私は普通の中学生が入学して卒業するまでの間に合わせて15学年くらい飛び級し、10以上の論文を書き、博士課程を卒業、晴れて博士となつた。世の中は中3の2月の末だつた。：：とはいへ、周りの目には、私は義務教育を終える中学生どころか、大学生ですらもなく、一人の若い、未来ある研究者として映つていたんだ。多くの人は、大学でこれからも長く研究を続けて行くものだと思つていた。

私もそうしようとは思つたが、ある技術が足りなかつた。——測量技術だ。大学では測量のことは一切やらなかつたし、研究の時はできる人間に任せていたのだが、これらはどうしても自分で測量しなければならない日も来るだろうし、技術は持つていて損はないと思つた。：：ところが、大学ではもう測量の基礎を学べる科目はなかつた。海洋大学だつたからな。できるやつのみが集まつていた。そこで私が選んだのが：吳女子海洋学校への入学だつた』

「吳に打診してみたら、いくつかの書類を要求されて、そのまま入学を許可された。そして：あの筑紫座礁事件を経て、舞鶴に移り、大和（このふね）に乗ることになつた。艦長として、皆と共に」

以上だ、と言つて、艦長は口と目を閉じた。

そのあとしばらく、教室はざわざわしてた。

私が知りたかった「あること」を知ることは出来なかつたけれど、それでも艦長の話は予想や噂を大きく越えていて。

その場にいた誰もが、艦長のことを予想よりもずっと、自分達よりもずっと、上をいつている（少なくとも一部分においては）ことを思い知った。

人間は、不思議です。

私はそうはならなかつたけれど、人間、特に自尊心の強いようなのは、自分がある相手に負けていることを知ると、どこかで優越できる点がないかとあら探しを始める、と、何かで読んだことがあります。

そしてこの場合も、どうやらそれが発現したみたいで。誰かが立ち上がり、こう叫びました。

「…だったら、艦長は地理の成績良くて当然じやないですか。ズルですよ、そんなの」艦長はそう言われたとき、何か酸っぱいものを噛んだ時のように、一瞬だけ目を細くすぼめて、悲しげな表情をさせました。

その時に私は、多分こういう指摘を受けることを艦長は予測していたんだろうな、と感じました。

でも、大衆心理はその程度で動かなくて。

「そもそもテスト受けてないのにここにいたんですか??」

「艦長と私たちで何が違うの?」

「それで艦長になつたの?」

「高柳さんが本当は艦長になる予定だつたんだね?」

「高柳さんの方が良かつた」

云々。

一部のラディカルな皆さんに詰め寄られてもなお、艦長はなにも反論することなく、俯いて目を閉じたままでした。そこに込められた感情が何かは、分からぬ。

もつとも、不快感をあらわにして艦長に詰め寄っている人は精々10人弱で、その他生徒は私含め、席に座つていきました。しかし、艦長の擁護に動いている人はいないま。私もそうだつたけれど、知らされた事実を整理して、自分の考えを立て直すので精一杯だつたのです。そういう人たちとは、艦長がもう話をしそうにないことを見ると、無言で、何か考えたまま、教室を去つてしましました。

そうして、その場に座つたまま残つていたのは、私と、副長の高柳さんと、書記の国東さんと、測量専科の大雪さんの四人だけでした。

私は少し前から、座つて俯いていた状態から脱却して、周囲を見渡すことができました。それに関する全ての思考をいちど後回しにすることでなんとか心に平静を戻

したからです。

けれど、大雪さんは、まだ俯いたままで、むしろ何かしら思い詰めているかのようにな強く目を瞑つていました。心なしか、少しだけ震えていました。

国東さんは、ほぼ前の方に当たるので表情こそ分からなかつたものの、既にペンをもつて紙に何か走らせていました。まるで全てを最初から知つてているようでもあります。

もしかしたら艦橋組はみんな知つていたのかもしないな、と一瞬だけ思いましたが、それを否定させたのが、高柳さんでした。彼女もまた大雪さんのように何かしら思ひ詰めていたような表情をしていましたが、目を閉じていた大雪さんとは違つて、艦長の方をじつと見つめていました。そこからは何か強く思うことがあることしか分かりませんでした。

しばらくして、前に出ていた人達が戻ろうとすると、ガタアン！と言ふ音と共に、大雪さんが立ち上がりました。その時は全員の視線が大雪さんに集まつていました。——艦長含めて。

大雪さんは静かに艦長の前に歩いていき、そうして、何を言われるのか分からぬで少しだけ戸惑つて、こう言いました。

——私には、すごく仲の良かつた幼馴染がいてさ。身長やら成績やら、何につけても競

争してた。そして殆どが実力伯仲。でも、測量とか、数学系の成績だけは勝てなかつたんだよね。

：呉も一緒に受験したんだ。でも私はちょっとだけ数学が出来なくて、直前まで教えて貰つてた。それのおかげで、入試で教えて貰つたとこが出たから、私は受かつた。けれど、あの子は受からなかつた。自己採点のとき、あの子はすごく気難しそうな顔してて。聞いてみたら、私と3点差で負けてたんだ、自己採点。その時は、まあここまで点数が近ければ、どっちも受かつてるか受かつてないかだつて、一緒に笑つてたんだ。

けどボーダーは、その3点に、その1問のところに引かれた。私は慰めたけど、それは上から目線に過ぎなくて。勝つた側が負けた側を褒めているに過ぎなくて。そのままで疎遠になつて、もう長く話してないんだ」

大雪さんはそう語つた。

ここまでの話を聞いて、先は読めた。多分みんな読めている。でも、話は続いた。

「私はずっと自分を責めてさ。どうして私だけ受かつてしまつたんだ、一緒に落ちた方がずっと良かつたつて思つた。思つてた。今も思つてる。

：けど、艦長さん。さつきの話が本当なら、艦長はテストを受けてないのにここにいるんだよね？もし艦長さん：いや、艦長が、ここに来なければ、あの子は確実に受かつてたんだ。：いや、言い方が違うや。あの子は受かつてたんだ。けど落ちた。艦長が：

お前がつ、押し退けたんだ！」

おそらく、事実はそうではないだろう。

矛盾や不可解な点が多すぎる。私の見たてでは、そもそも多分その幼馴染さんは嘘をついている。何故なら、今の話が事実ならば、大雪さんはギリギリで受かつたのだから、成績が悪くないといけない。しかし、彼女の成績はむしろこの船ではいい方だ。それに彼女は測量副長なのに、測量は苦手だと言う。少なくとも、大雪さんについてはボーダーからかなり余裕のある位置にいたはず。恐らく幼馴染さんは相当のコケ方をして、落ちるべくして落ちたのだ。けれどそれを悟られたくない一心で、その場凌ぎの嘘をついた。3点だけ負けたと言う嘘を。

もしそうでないなら、入試、そしてそれまでは成績が低かつたけれど、何らかの理由で一念発起して成績を上げる必要が——

(……ッ!!!)

いた。入学以前に低成績だったはずなのに、ここでは大きく成績を上げた人物！

——いや、これは私（こっち）の話だ。大雪さんは全く関係ないの。思考を戻そう。

……ただ、大雪さんと幼馴染さんとの事実がどうであるにしろ、「一方は受かり、一方は落ちた」という事実は変わらない。そして、幼馴染さんの方が受かる確率が高かつたのに……ということも。

それについて、艦長という丁度いい感情のぶつけ先、責任の押し付け先が出来たのだから、感情論に立てば、艦長を責めるのはある種仕方ない。そういう状況において、論理だつた正論は受け入れられないから。

艦長は押し黙り、俯いていました。

教室は静かだつたものの、しばらくして、大雪さん以前に艦長に詰め寄つていた人達が、こう言う。

「艦長：私達は、ちょっと納得できません。しばらく、指揮権を副長に委譲してください」

それは、クーデター宣言。

副長も国東さんも若干驚いた顔をしていましたが、クーデター発案者の彼女達は、面白い事でもあつたかのように、黙りこくつてている艦長をひつ擗んで、どこかに連れていこうとしました。おそらくは艦長室へ、軟禁に。

流石にこれはまずいのではないかと思つて、艦長つゝと声をかけようとして立ち上がつたのですが、制止されました。

艦長に。

「島村、やめてくれ。仕方のないことだ。

⋮それに私はまだ、君に隠し事をしている」

(…!!)

艦長はそれだけ言つて、攢む周りの手を払うと、艦長室だろ、といつて、自分から去つたのでした。彼女たちを伴つて。

教室には無言が残つた。

流石に反乱は…これはまずい、今艦長へ反乱なんて起こしたらそれこそ横須賀と同じになつてしまふのだから!

私は副長に詰めよつて、

「副長! どうして止めないんですか!」

と批難しました。

しかし。

「私だつて、艦長に不満はあるんですよ」

と言つて、去つてしまひました。

ここに、実質のクーデターが成立したのでした。

私は、どうしたらいいか分からぬけれど、もう不満をぶつける相手はいない部屋（国東さんはいる）にいても仕方ないと思つて、その場を去ろうとしました。

その時でした。

「…島村…さん」

「へ？」

振り返ると、思い詰めたような表情で、国東さんが立っていたのです。

国東さんの声は、もしかしたらはじめて聞いたかもしません。透き通った綺麗なソプラノでした。

「国東さん…？」

「…（コクツ）」

「何でしようか？」

「…話が…あるの…」

きつと艦長の事だろう。

「長いですか？落ち着ける所がいいですか？」

「…（コクツ）」

「じゃあ…あそこかな。

私の仕事場…マストに行きましょう。二人ぶん暗いのスペースはあります。寒いで
すから、毛布とか持つていった方がいいと 思います」
マスト。

この船では正式な個人スペースは艦長室だけだが、一人でいられるスペースとして
は、マストもまた引けをとらない。普段は第一マストに私、第三マストに月視ちゃんが
入っているが、そこにはよほどの事がないと担当以外の人は来ない。私の手伝いとして
サブとして見張りをしてくれる人もいるので私物が持ち込めるわけではないが、見張り
は一つのマストに一人なので、一人でいられるスペースではあるのだ。そこなら、二人
でゆつくり話せる。港にいるから、担当もいなし。

「…大丈夫。私、道産子」

そうだつたのか。知らなかつた。

「…それと…」

「？」

「…敬語じや…なくとも…いい」

そうなのか。

国東さんといえば、無口なこともあつて、余り人と関わろうとしていないから、敬語
が出てしまう。何となく威厳があるのだ。
でも、敬語が要らないというのなら。

私に何か相談をしようとしてきている。相談相手が満足できる環境を作るのは当然
でしょう。

「そつか、じやあ行こう、マストへ（――）d」
国東さんは頷いた。

（…私も、艦長の言葉は気になる。秘密にしていること。多分、あの人のことだ。
…ま、検討はついてるしね）

そう心で呟いて、二人でマストへ向かつた。

八話 暗躍—S i d e ; 島村悠希菜

——大和 艦長室前 2016／4／16／0700

艦長室の前に誰かいるかと思えば、誰もいない。

もつとドラマ的な展開を少しだけ期待していたのだけど、現実はどんどん拍子に事を進めてくれたのだ。感謝しよう。

——そういえば艦長室つて入ったことないな——そんなことを考えつつ、私は艦長室の戸を叩いた。

「誰だ」

「島村です。お話を」

そのあとの返事はすぐには現れなかつたけど、どう考えているかはすぐに分かつた。ドアが開いたのである。

「お邪魔します」

「良く來たな、島村」

「鍵も無いしやろうと思えばすぐに脱出出来るんですね、この部屋」

「そうだ。まあ、そんなことをやつても連中の感情を煽るだけだからな……ああ、そこにか

「けてくれ」

そう言つて艦長は私に机の椅子に座るよう促し、自らはベツドに腰を掛けた。普段から艦長はこのベツドをソファーライドとして愛用しているのだという。

「…それで、話とはなんだい？」

「急ですね」

「読んでいる本が良いところでね。早く続きを読みたいんだ…そこの。」

確かに机の上には葵を挟んだ本が置かれていました。緑色のヒモが、こちらに向かって伸びている。

カバーがかけられてタイトルは分からぬが、けして薄くはない文庫本サイズの本で。椅子に座り机に向かつて読んでいたのだろう、天地の方向がこちらに向けてほぼまつすぐに置いてある。

…だけど、これは多分…

「…嘘ですね」

「…ほう、理由は？」

「別に確証はありません。ただ、私がノックしたとき、もし艦長が本をベツドで読んでいたならば、艦長はきっと本をベツドに置いていた筈です。それが自然です。でも机の上に最初から置いてあつたので、艦長は机上で読んでいた…と思つたんです」

「確かにそうだ。私は椅子に座つて読んでいたよ」

「そう言うと思いました。でも少し変ですよね」

「何がだい？」

「その本、葉のヒモがこちら側に出ていますよね」

「つまり？」

「スピニン…つまり本に付属の葉紐であれば、通常ヒモの出た方向が本の、天地の地の方向になりますよね」

「そうだな」

「もしその本から出ているヒモがスピニンであれば、ヒモがこちら側に出ているのは何も問題はありません。しかし、あれは葉です。スピニンにしては、挟まれた部分が厚すぎますからね。であれば、あの葉、つまりヒモのついた葉は、ヒモのついた側をこちらに向けている、ということになります」

「…」

「お分かりですよね？通常、ヒモのついた葉は、ヒモのついた方向が上に当たります。ですから、そのヒモがこちら側に向けて出ている以上、あの本は天地の天の方向をこちらに向けている事になります。ほぼ直角に。つまり、艦長は椅子に座り机に向かって小説を読んでいたのに、私が訪れて席を発つた時にわざわざ逆さまの方向に本を置いたこと

になります。自然に流れる動作のうちにねじ込むのは、ちょっと不自然です」

「だが……」

「ええ。勿論、艦長がしおりを下側に向けて挟む性格であつたり、ありえませんが上下逆さまに本を読む性格であつたりするなら、話は別です。：だから最初に『確証はない』と保険をかけておいたのですが、そうなのですか？」

「……いや。見事な推理だ。さつきまで寝てたよ」

「そうですか。推理が当たつていたのなら、嬉しいです」

「……とはいって、話を早く聞きたいのは事実だな。

：『隠していること』の話じゃないか？」

おつと、忘れてた。推理は楽しいからついなんでも推理してみてしまう。

「おつと、すみません。でも正解です。その事です」

「……とりあえず、君の推理を聞こうか、島村悠希菜」と、艦長はそう言い、こちらを睨み付け、続けて、

「籠原双葉の中学時代の同級生として、君は私に何を思う？」

籠原双葉。

野付艦長にして、私の中学時代の同級生。

最も仲の良かつた友人の一人。

「…そうですね、私はある結論にたどり着きましたよ」

と、私はそう言い、艦長を睨み返し、続けて、

「貴女は元々野付の艦長に内定していた、そうですよね？」

沈黙。

それは、私の推理が当たり、あるいは少なくとも的外れではないことを証明していく。艦長は目をつぶり、返しました。

「…聞こう」

その言葉を確認して、私は語りだしました。

「筑紫が事故沈没して、野付と筑紫の艦長内定者が呉に集められました。そこで双葉と艦長が初対面。七島珠洲ら旧筑紫メンバーが、舞鶴の大和に乗ることになった…というのが、語られてきた共通認識です。」

「そうだな」

「…でも、おかしいんですよ。私の知っている、中学時代の籠原双葉は、野付の艦長に内定する——つまり、測量科入試で主席合格するほど成績がよくありませんでした。入試後の自己採点は、私よりちょっと高い程度だったんですよ。…それこそ、二番手艦のトップあたりじゃないかって位の。」

「…ひどい言い草だな」

「双葉ですからしいんです。ずっと不思議だつたことでしたし。

…そして艦長。いくら技能が足りないからと言つて、わざわざ入学を打診してきた海
洋研究界期待のホープを、二番手艦の艦長ごときに据えたりしますか？当然一番艦、つ
まり野付に付けられるはずです。…おそらくは、艦長に。…つまり、野付と筑紫の艦長
内定者が呉で対面したのは、それは事実でしょう。ただし、野付艦長内定者・七島珠洲
と、筑紫艦長内定者・籠原双葉が、ですが」

「…続けてくれ」

「そして、そこで何かしらの事情があつて艦長と双葉がそのポストを入れ替わらざるを
得ない状況になつたのだと思ひます。…いや、おそらく艦長がそう希望したんですよね
？」

「…」

「…双葉は、それに押し負けて野付の艦長になつたんですね。けれど野付の艦長とは、
すなわち測量科トップ。それだけ彼女は勉強をしなければならなくなつた。二番手ク
ラスの艦長から、一番手クラスの艦長レベルまで。中堅から最上位へ。人知れず、孤独
な戦いに挑まざるを得なくなつた。簡単なことではなかつたでしようね。でも双葉は
並々ならぬ努力の末にそれを達成した。…まあ、元々本気になれば何でも出来る人でし

たけど

「…」

艦長は黙つたままでした。それは、自分の推理が大それたものでないということを証明していく、私はここで漸く自分の推理が完全に正しいことを確信して、自信を持つてこの後を語ることが出来た。

「…艦長、私に隠したかつたこととは、その事ですね。

野付艦長は元々、貴女だつたこと…そして、入れ替わつたことで私の親友に、『優等生であるプライド』を突然にも与えたこと、今も…それに囚わせ続けていること。
私の親友に苦痛を与え続けていること。

「…」

「その事ですよね？でしたら…」

「…」

「私は、全く…」

そこまで言つたとき、艦長が割り込みました。

眼を閉じて、俯いている。

「違うな」

「…へ？」

「だから、違うよ」

「…え、ああ、いや、双葉が苦しんでいても私は別に…」

「そこじゃない」

「そこまで言うと、艦長は眼を開いて、こちらを見た。

「推理だよ。その推理は、ハズレだな」

「…なんですつて？」

「…まあ、大筋で合っている。99・98%まで合っているんだが…お前はどうして自分のことを考えないんだ。一時期の私にそつくりだ」

「ど、どういうことですか？」

「簡単だ、馬鹿め」

「ええ…ちょっと傷つきますよ」

「いいや。自分を過小評価する奴には荒療治が必要なんだよ」

「べ、別に過小評価してるわけでは…」

「あるんだよ！ああ、腹が立つなあ、頼むから鏡を見せないでくれ」

「…」

「いいか！私も別に、籠原が傷つこうが苦しもうがどうでもいい。ただ、私は…」

「艦長は…？」

「お前を…島村悠希菜を、その親友と離ればなれにさせてしまったこと。ただそれのみが、私の負い目だ」

「…」

「…」

「艦長」

「なんだ」

「するいですよ」

「怜俐狡猾と言つてくれ」

「謹んで、お断り申し上げます」

そこまで話をして、そうしていたら、なんだかおかしくなつて、ふふつとお互に笑つた。

艦長はなんだか上機嫌で、その後もいくつかのことを話してくれた。

「…にしてもお前の推理はなかなかにイイトコついてるな。大筋では全くその通りで、私が呉に声を掛けた途端に一番良い船の艦長職を用意してくれたんだ。まだ一般入試の採点途中だつたみたいで、役職が決まつていなかつたのもその理由のひとつだつたらしいがね。…まあ私は始めは野付に乗るつもりだつたんだが、そうしたら筑紫の沈没事故で説明の為に呉に呼び出された。それが野付艦長内定者の私と、筑紫艦長内定者の籠

原だつた。当事者たる籠原だけでなく私まで呼ばれたのは、どうやら生徒に説明するのは生徒が一番よい……らしい。詳しいことは全く教えてもらえなかつたがね。……まあとにかく、筑紫が沈没したから筑紫乗員内定者には舞鶴の大和に乗つて貰う、という説明……いや、事後報告だつたわけだ、その招集は。

ここで私の気が変わつてね。帆船というものには前々から興味があつたんだ。そして籠原が仕方なくそれを受け入れようとするのを見て、こいつは私よりも余程マシな人間だ、と思つたんだよ」

「双葉ですかあ？ マシじやないですよ双葉は」

「それは後で分かつたことだからな。

呉に呼び出されたときに、説明してくれた奴が来るまで少し籠原と話す時間があつてね。あいつは私のことを知つていたようでな。名乗つた途端に口をあんぐりさせていたよ。どうやら中学生論文大賞：私が大賞をとつて北洋大に招聘されるきっかけになつたあの大会に、籠原も論文を出していたらしくな。そして地理は少し得意だつたようでね——まあ君は同級生だから知つてているだろうが——私の話に食い付いてくれた。：同年代である程度とはいえ話の通じる奴を私はそれまで知らなかつた。周りには大人しかいない。そして周りの連中は、私に『まだ子供であるという、年齢設定、』のみを求めた。中学生らしい青春やら何やらは私には求められてはいなかつた。だから、多

少なれども話の通じる同い年がいることはほど嬉しいことはなかつたんだ、私はね。：そしてそのとき、私は情けなくなつたんだ。二番手艦に乗るようなものですから且つこうなのだから、況んや他の者をや、地理について既に多くを知つてゐる者はたくさんいる。そして、測量技術…それだけじゃない、中学生で習う地理以外の全ては、皆が皆私よりもずっと多くのことを知つてゐる。にも関わらず、私は単に地理で他人より多くのことを知つてゐるだけだ。それなのに、私はそれだけの理由で受験戦争を尻目に一番美味しいポジションにつこうとしていた。それが情けなかつたんだ。

それに比べれば、そのとき私の隣に居た籠原双葉という人間は、受験戦争を勝ち抜き、来るべくして来て、そして舞鶴行きの指示を否応なく受けとる。その時、何となく見過ぎしてはいけないと思つたんだ。私は野付の艦長には籠原双葉こそ相応しいと言つて、そして私は精々沈没した筑紫の艦長職がお似合いだと言つたんだ。そのあと色々あつて、結果私と籠原で役職を入れ替わることにしたんだ。」

「そうだつたんですか？」

「そうだ。だいたい推理通りだつたろう？…あの時は籠原にけつこう酷いことを言われたな。天才の椅子に座れ、とかなんとか。文句なら土俵に立つてから言えよとも思つたが、それは傲慢が過ぎるし、土俵に立つていないので私の方だつたから、言い返せはしなかつた。そして籠原はもう地理以外の全教科で学年トップと來た。あちらが横綱な

ら、私は序ノ口がいいところだ。地理だけは譲らないが、私は籠原を尊敬しているよ」「…まあ、それは私もです。双葉は元々始めると止まらない性格でしたから、そのベクトルが勉強に向かえれば私では勝てないだろうなとは感じていました。…まさか本当にそうなるとは思いませんでしたけど。

「…そういえば、詩歌ちや…もとい、国東さんなんですけど」

「ああ、詩歌がどうした?」

「国東さんが、おそらく艦内で一番艦長のことを気にかけています。今も艦長を復職させんと暗躍しています」

「詩歌がか。…そういえば、詩歌も元々野付の書記になる予定だつたんだ」

「えっ!? そうなんですか?」

「そうだ。詳しいことは知らないが、筑紫に…つまり大和に乗ることになった書記が、舞鶴に行くのが嫌だと言つて、野付に乗せるよう要求したそうだ。結果として野付の書記だつた国東詩歌が応じて入れ替わることになつた、つて訳だ」

「国東さんは、それで良かつたんですかね?」

「さあ。だが、詩歌と私は入学前から面識があつてね。それで詩歌も私と一緒の方が良かったのかもしけん」

「…? 同じ中学だつたんですか?」

「いや。上司の娘だよ。大学の私の上司のひとりである…といつても専門分野は違うが、国東博栄教授の一人娘さ。教授の紹介で知り合つたんだが、これがもう博識でビックリしたよ。父親から色々叩き込まれたんだろうね。…さつき籠原を『同級生でこんなに話の通じる人がいるとは』って言つたが、詩歌はそれ以上だった。だから彼女はノーカウントだよ。なんせ大学教授の娘だからね。」

「艦長は、大学で何の研究をしていたんですか？」

「海洋地理さ。…というかその話しなかつたつけ。…まあ、海岸線やら海流やらを扱う学問さ。特に日本近海は、地盤沈下による海岸線のこれから変化なんかは注目されている事柄だからね。まだまだ研究の余地がかなりある学問だよ。私の直属の上司の鎌ヶ谷教授はまさに海岸線の変化に関する研究を専門にしていて。…だから私が将来的にやりたいこととは微妙に違う」

「艦長は…？」

「私は海底地理学。要するに海底がどう変化するか。海岸線の変化も扱うが、メインはそつちだな。例えば…そうだな、『おおよそ標高30m程度で、高いところでも50m程度の原っぱがある。南北は海に面し、東西は標高100m以上の大地に囲まれた凹んだ原っぱである。子の付近が約100m地盤沈下して沈んだ時、この原っぱは当然新たな海底となるが、この原っぱはいつたいどんな地形変化を辿るか？』みたいな」

「…平坦になるのでは？」

「結論を言えばそうだ。この例えれば実例に乗つ取つてゐるんだが、確かに平坦になつた。では、どの程度だと思う？」

「その50mあつたところが30mの周りと同じに…あ」

「気づいたかい？そう、それが30mになつたとして、周りの『もとから海底だつた部分』とは、依然として30m高い位置にある計算だ。では30m、さらに削れていくのか？ 削る海流はどこから生まれる？勿論新しい沿岸との兼ね合いもあるから全て削れていく訳ではないだろうが、では最終的にどんな地形で安定するのか？海底の土の質はどう変わるのか？」

「それは…」

「それを研究するのが私の将来のビジョンさ。特に今言つたような実例——旧択捉島の留茶留原平原だが——は、もし水深がこれからもある程度深くなり続けて、大型船舶の通行も可能になるとしたら、そこは恐らく交通の要所になるであろう場所でね。私はこれを研究しつくすことが夢のひとつなんだ」

「…」で足踏みしてたら、誰かにとられませんか？」

「さあね。それは残念だが悔やむことじやない。結論は早く出るに越したことはない。

それに…」

「それに？」

「その水域の片方の沿岸部は全部丸々七島家の土地だから。隈無く調査するには七島家当主の父の許可が必要だ。誰にも譲りはしないよ」

「コワつ！ というか七島家土地持ってるんですか!?」

「まあな。20000haくらい」

「広っ！」

「大したことないさ。維持費も高くないし」

「いや、そんなレベルじやないですよ！ バーベキューパーティーとか盛大に開けるじゃないですか！」

「はは、そうだな。…待てよ、そうだ、そこを使えば…」

「…？ 何ですか？」

「いや、何でもない。お楽しみだ。」

「このあとなにするおつもりですか…。…そういえば、艦長のお父様が七島家の御当主なんですよね？ 次期当主は…」

「私だよ。兄弟がいないからな。半ば結婚をさせられることが確定しているから当主になるのはあまり望むところでは無いんだが…どうした？ 震えてるぞ？」

「…いや、艦長とはこれからも仲良くしようと心に誓いました」

「…何のことだ？」

「…こつちの話です」

「…そうだ、詩歌は今何をしているんだ？」

「暗躍ですよ」

「いや具体的に」

「ああ：その事ですか」

「え、聞いてはいけない奴なのか?!」

「いえ別に」

「ええ…」

「でも詳細は次回お届け！ 次回 「暗躍—Side；国東詩歌」 お楽しみに！」

「急にメタくなつたなあ！」

九話 暗躍—S i d e ; 国東詩歌

——大和 会議室 2016／4／16／0700

こんちやーつス！

覚えてるつスか？神宮寺つス！

今日は臨時の会議があるらしいんスが、艦長さんが軟禁中のいま、この会議はどうなるんスかね？

我々イツメンこと重役（笑）会議の面々もまた、対応に困つていて。我々は『周りが帰り始めたので帰るか』みたいなノリでみんな途中退出してしまつたもんで、その後の軟禁？の流れも知らないんスよね。気付いたらトップが変わつてた、みたいな。軽いノリと思われるかも知れないっスけど、『まあなんとかなるだろ』みたいな雰囲気なんスよ。だつて、まだ一晩しか開けていないんスから。そして、その『なんとかなるだろ』精神を育んだのは、他ならぬ艦長さんつスし。

でもイツメンは全員が全員、『いやこれまでいだろ』っていう認識を抱えてはいるんス。でもどう動いたら良いかは分からずつて感じつスかね。特に高遠測量長なんかは、

直属の部下が当事者つスから、日頃から寝るのが日課の測量長も胃痛で寝られてないようで。それに艦長さんに対する考え方も、反乱に至るほど過激では無いけれどたしかに立場の違いがあるんス。例えばミス朝田や那須野操帆長なんかは成績優秀なので艦長さんに現状総得点で勝てるからか別にどうでもいい見たいつスが、柿崎機関長は艦長の地理が普通レベルだつたら勝てるの「私も機関で大学いつてれば良かつた」と皮肉混じりに言つてたつス。ここから先は点数低い人のヒガミなので触れないつスが、この神宮寺はどうかといふと、：まあ成績のことは別にいいぢやないつスか。ね？不肖神宮寺抄、普段から料理しかしていないつス。料理に三角関数や漢文の智識が要るとでも？…まあ、正直なところどうでもいいつス。艦長がどうだろうと私の人生の体勢に悪い変化が起ころたあ思えないつスからね。

まあでも、事実として、やつぱり艦長さんでないと弊害は起きるつス。そもそも高柳さんの指示には、もうすでに「コイツ駄目だ」感が漂つているんスよね。自分で指示しないで、全部個人個人に任せきりなんスよ。悪くはないんスが、やつぱり指示があつた方が良いつス。…いや違うつスね、艦長も割と放任だつたつスから…。でもその代わり艦長さんはよく話をしてくれるんスよね。艦橋に居ても操帆科や機関科に積極的に声かけてるみたいつス。非番の時は調理室にも顔をだしてくれるつスよ。つまみ食いして帰つてくつスけど…まあ要するに、副長は艦長にある何かを持つてないんスよね…

まあそんなわけで、会議はいつも通りごちやごちやしてゐるつス。まだ開会もしていないのに。

そのときつス。

「…みな…さん」

誰かがそういうつて、

「「「「え??」」」」

普段この程度じやあ静まらない我々が、一気に静かになつたつス。

そりやあ、全員が発言者を二度見するつスよね。

「…ひつ（ビクツ）」

滅多に喋らないお方だつたんスから。

「国東さん…」

国東詩歌書記。

静かで物を話さないことで知られている、無口なお方つス。仕事はするんスが、声を聞かない。実は地理に関して艦長について出来る御仁で、艦長が事情持ちだと分かつて以降最も怒つて良いハズの船員のひとりなんスが、自分から何かすることはなかつたつス。

けど今、アクションを起こしたつス！

キヨトンとする会議室中の目線を一身に受けて、なおも国東書記はこう言つたつス!!
「…みなさん、お…お話が」

——15分後

高柳 「はい、では臨時重役会議を始めます、司会は私、副長高柳が…」

神宮寺 「フウウウウウウウウウウ!!!」

高柳 「!?」

朝田 「神宮寺黙れいい加減にしろ」

神宮寺 「おおつとミス朝田! こればっかりは口を出されたく無いつスね! 保健室に
帰つておねんねしてろつス!」

朝田 「黙れ…今薬を持つてくる」

神宮寺 「何の薬つスか? 神宮寺に使うのはもつたいないんじやなかつたんスか?」

朝田 「劇薬だ」

那須野 「それはダメじやないですか…」

萩原 「会議中なのですよ! 静かに…」

神宮寺 & 朝田 「黙(るつス・つてくれ)…」

萩原 「またなのですかあ!」

高柳 「?!??」

常陸 「どうしたの副長」

高柳 「いやどうしたもこうしたもなにこのカオス！」

常陸 「副長、これくらいいつもの事だしこの程度で狼狽えてたらマジこの先もたないよ」

高柳 「ええ…」

柿崎 「ごめんね、副長さん…」

高柳 「いやそう思うなら止めようよ！」

柿崎 「あれは無理かな、あはは…」

高柳 「ええ…」

高遠 「黙れっ、てめーら！」

高柳 「おおつ、高遠測量長流石で――」
高柳国東高遠以外 「高遠が起きてる!!??」

高柳 「は？」

朝田 「なん…だと…」

柿崎 「珍しいね…」

萩原 「いつもと違うのです…」

那須野 「普段は寝て いますし……」

神宮寺 「明日は大雪つスー！」

柿崎 「ここ千島だから大雪は普通に降るよ……」

高柳 「いやちよつと失礼すぎやしませんかねえ！」

高遠 「実にそう。失礼」

高柳 「そうですよね！ほら言つてやつて下さい、いつも寝てる訳ではないと——」

高遠 「うるさいと眠れないんだよ！」

高柳 「そこかよ！」

高柳国東高遠以外 「サーセン w」

高柳 「軽いわ！」

神宮寺 「スマートン！・ゞメンチ！」

朝田 「お、・じか？ゴニヨゴニヨー」

高柳 「は？」

神宮寺 「副長このネタ知つてるんスか?!」

高柳 「は？」

神宮寺 「は？」

高柳 「…」

神宮寺「…」

高柳「…」

神宮寺「…すまんな」

朝田・柿崎「ええんやで」

神宮寺「はいカブツた、アウトっス！」

朝田「くつ…」

柿崎「焦りすぎたね…」

高柳「…」

常陸「副長? どーしたし?」

高柳「…いや…会議やりましようよ…」

常陸「いやそれ言わないと始まらないし」

高柳「いやそうなんだけど、そうなんだけど…」

常陸「みんな根は眞面目だしちゃんと話せば会議始まるつて。コレはマジでいつも
どーりだから」

高柳「本当に?」

萩原「本当なのですよ。眞面目な会議を眞面目にやるぶん、始まる前と後ははつちや
けてよい、という艦長のお達しなのです」

高柳 「そうなんだ…」

萩原 「まあ例外はあるのですが」

高柳 「あるんだ!?」

萩原 「そこまでの例外ではないのです。単に、真面目じやない議題…つまるところどうでもいい議題だつたらみんな無視してはつちやけるのです」

高柳 「へえ…今回の議題は真面目だから大丈夫かな」

萩原 「それを決めるのは議題の提出者ではないのです。ぶつちやけ神宮寺なのです」

高柳 「ええ…」

萩原 「まあものは始めないと分かりません。声かけてください」

高柳 「いや萩原さんがやつてよ…」

萩原 「私にはもう無理なのですね」

高柳 「ええ…じやあ…」

高柳 「みなさん、会議始めますので！一旦静かに！」

全員 「……………」

高柳 「うわ本当だつた！」

全員 「……………」

高柳 「では会議を始めますね」

全員 「.....」

高柳 「...よろしいですか？」

全員 「.....」

高柳 「...そんなに固くならないでいいですよ?」

全員 「イエエエエエエエエエイ!!!」

高柳 「そうじやないよ! 黙れよ!」

全員 「.....」

高柳 「黙つてんじやねえよ!」

全員 「.....」

高柳 「あれ.....?」

全員 「.....」

高柳 「どう転んでもアウェーだつたああ!!」

一部メンバー 「始めるんだよあくしろよ」

高柳 「誰のせいですか、誰のつ!」

(気を取り直して)

高柳 「ええー、では会議を始めますね。今回の議題は、真面目です。艦長を軟禁して事実上の反乱を行っている現状、我々には団結が必要です。そこで、各部門の長たるみ

なさんに、是非ご協力頂きたいのです」

全員「………………」

高柳「…続けますね。そこで、具体的には——」

全員「フウウウウウウウウウウウウ!!!!」

高柳「?」

全員「イエエエエエエエエエエエイ!!」

高柳「あの…」

(騒ぎは収まらない。高柳が困っているところに、萩原が声をかける。)

萩原「副長：」

高柳「な、なんでしょう…」

萩原「申し上げづらいのですが…これでは多分議論続行は無理だと思うのです。副長

が悪い訳ではないので、後日臨時会議を開いてはどうでしょう?」

高柳「…変わりますか?それで」

萩原「誓つて、変わるのでです。」

高柳「でも…これはつまり『この議題はどうでもいい』と思つてゐる訳でしよう?」

萩原「そうではない、と思うのです。少なくとも私はそうではないのです。このメン

バーの中にも艦長に複雑な感情を抱いている人はたくさんいるのです。ただ、定例会はこうなるのが常みたいなもので。臨時会ならば、確実にまともな会議になるのです。」

高柳「本当ですか…？」

萩原「はい。重役会議メンバーの一人として、今ここで重要な会議を出来ないこと、そして暴れる皆を止められず静観するしかないこと。申し訳ないのです。」

高柳「あつ、いやいや、萩原さんは悪くないですよ!?」

萩原「いや…申し訳ないばかり…」

高柳「…私にとつても、起こしたくて起こした反乱じやないんです。祭り上げられて。でも艦長の仕事つてこんなに大変なんですね。」

萩原「副長…」

高柳「…なんでもないです。臨時会では良い議論になることを望みます。…私は一旦部屋に戻ります。」

(高柳、部屋を出る。部屋のざわめきは次第に小さくなる。)

萩原「副長…本当に申し訳ないのです。本当に…」

——会議解散後、艦橋

朝の、まだ顔を出したばかりの日の光が波打つ海を照らし、波の照り返しが少し眩し

い。

会議のあとで、私は、少し罪悪感を感じ、ただ、艦橋から見える限りの海を、網膜に投影するのみだった。

「…書記ちゃん。ここにいたんだ」

「…（クルツ）」

声がして、振り向いた。声は何度も聞いたことのある声で、すぐに主は分かった。元気に溢れていて、少し苦手なタイプ。けれど、物怖じせず何でも言えるその『普通』が、少し羨ましい。

「書記ちゃん、隣いい？」

「…（スツ）」

何となく、横に動くと、空いたところに彼女は来た。

航海長、常陸楓芽子。

操舵を一手に引き受け、この船の要。

少しの間、無言が続いて、私も言い出せなくて、困っていたけれど、航海長はそれを察してくれた。嬉しい。

「書記ちゃんさ、さつきの会議…マジであれでよかつたん？」

「…」

「アタシ驚いた。まさか書記ちゃんが『会議をわざと妨害してほしい』なんて頼むなんてさ」

「…副長には…申し訳ないことを…した」

「アタシもそう思う。止めなかつたのは、あれがマジで面白かつたからつてことだけだし。でも罪悪感つつーの？なんか悪いことしたなーみたいな。それ感じちやつてさ」

「…でも…艦長を復権させるため…」

「ま、それも分かるケド。けどさ…」

「…ん？」

「副長をさ。このまま追い詰めるばつかで良いのかな」

「…それは…」

「追い詰めるべき人なんていないと思うの、アタシ。居たとしても、副長じやないワケ。

このままだと、副長、病むよ」

「…でも、これしか…ない。艦長の復権は…どうしても、指揮する人は…艦長が一番だと言うことを…、みんなが理解するしか…ない」

「その理屈は分かる。でももつとスマートな方法があんじやね？つてコト。艦長が一番だつて皆が思うつてことは、副長は無能だつて証明させるようなモンでしょ？マジで続けるの？」

しばらく私は黙った。

「…航海長」

「なに？」

「…それでも、今の状態は…よくない。私は…もとに戻りたい。それだけ。でも…そのためなら、私は出来ることをやる」

「…」

「…確かに、副長は何も…悪くない。担ぎ出された、それだけ。でも…反乱を抑え込むには…反乱が無益だ…と思わせるのが一番…だと思う」

「そ。書記ちゃんがそう思うならいいよ」

「…」

「アタシも乗るわ。トランプの革命返し、つてやつ？あれマジ爽快感パナイし。あれをリアルでやるんでしょう？いーじyan」

「航海長…」

「…ま、それだけ。アタシも仲間だから。ヨロシクね」

航海長は、そういつて戻つて行つた。

もつと言いたいことが有つたんだと思う。けど、言わなかつた。

きっとそれは、私に配慮してのこと。

私は人と話すのが苦手。

航海長はどんな人とも仲良くなれる、真逆の関係。
航海長にとつてはもしかしたら、私みたいなのは一番気を遣わなければいけない人種
かもしれない。

だからこそ、気を遣つてくれたことが、少し嬉しかった。

実際、ちょっと申し訳ない。

いつまで副長を追い詰めればいいのか。

いつまで副長を追い詰めなければいけないのか。

でも、その時は、以外と早く訪れた。

——松輪島東沖 2016/4/16/1945

夕暮れ。

艦橋には、私と、航海長と、副長がいる。

艦長は、いない。

私達は、今いる所から更に南西の、紗那の船との合流地点に向かっている。
これから、夜になる。安全な航海を心がけたい。

そのときだつた。

「緊急！緊急！こちら第一マスト島村。西の方角、丁度松輪島の方向に船舶二隻確認！」

島村さんが、連絡を入れてきた。

副長が、少し慌てて、「詳細、分かりますか？と聞いた。」

「見えません。いかんせん暗くて…。今井ちゃん、見える？」

「第三マスト今井。同じく見えない。…って言うか、まつすぐこちらに向かつてきてる」「第一マスト島村。双眼鏡で確認したところ、どうやら識別信号が…ついていないようです」

「第三マスト今井。同じく確認。識別信号の表示なしつぽい模様。少なくとも合流する船ではなさそう。船影が改インディペンデンス級ではない」

「どういうこと…」

副長は狼狽えていた。

そもそもそうだ。どこの誰かも分からぬ船二隻が、こちらにまつすぐ向かつているのだ。

「…と、とりあえず連絡取れませんか!?」

「第一マスト島村。やつてみます」

「…ちよつと待つて島村！あいつら、砲をこつちに向けてる！」

「ウソ！…ホントだ！…あれ、ちょっと待つて…これまずくない？」

島村さんと今井さんの声が強張る。

艦橋も緊張感に包まれる。

そして、その時は来てしまった。

「…不明船、発砲！こちらに向けて撃つてきた！」

十話 砲火は飛べど、飛び交わぬ

以下、砲雷長・神若冠の日記より。

4月16日

：

今日は色々ありました。

まず重役会議に欠席したこと。これは、艦長の代理として副長が重役会議に参加するため、私が代理の代理として艦橋に立っていたからです。なお、私が務めたのは艦長の代行である副長の代行であり、航海長の代理は普段通り今井月視・第三マスト見張が務めました。それで重役会議のメンバーを穴埋めに使うのもどうかとは思いましたが、別にいつもの重役会議ならば参加しなければならない必要性は薄いだろうという判断に基づいてのものでした。

しかし、本日において特筆すべきはそこではないでしよう。

夜に入つて間もない時間帯。松輪島東の沖、154°18'00"E, 48°25'00"N付近だと記憶しています。

船籍不明の船隊二隻が、西の方角から、つまり南西に向かつている船からすると二時

の方角より接近。詳細を確認していたところ、該船が突如発砲。これにより、該船が武装していることが判明し、艦内が混乱に巻き込まれました。

後で聞いたところによると、特に混乱が起こつたのは甲板で操帆をしていた操帆科の人たちだつたそうです。砲撃の第一波そのものは船のかなり手前に着水したのですが、それよりも急襲を受けたという事態に衝撃を受けた船員は少なくなかつたと思ひます。

私は、砲雷長、つまりこの船において砲撃を司る者として、自らの安全のために邀撃行動に出ることを辞さない考えでした。私と同じく射撃指揮所にいるはるちゃん——駒ヶ岳はるこもそう考えていました。

しかし、これはあくまで私達の判断でした。それに対して、艦橋側は、1発だけでは誤射かもしれない、と言わんばかりで、将来的に反撃が必要になるかも知れないが、それは今ではない。売り言葉に買い言葉ですぐ反撃に転じる前に、相手との交信を望む、と主張し、私達はそれに従い、射撃準備は行いませんでした。

また、艦橋側——具体的には副長——は、凡百の手段を講じて相手側と交信を図つたそうでした。国際信号旗や、発行信号、手旗信号などを用い、自らの船の子細を伝え、相手に応答を求めたそうです。しかし、その苦労も空しく、相手はこちらの通信の一切に応じず、無言を貫くのみでした。

ここで大和は進路を転換し、距離を詰める不明船に対して距離を取ろうとしました。

しかし、ここで第二波が襲撃します。

突如一隻が発砲。これを以て、不明船は味方ではないことが明らかになりました。第一波からは約七分の後でした。この第二波は船の後方に着水し、第一波とあわせると夾叉された形になりました。

第三波が来る前に、艦橋の様子は緊張感を増したというよりも、若干にピリついたようでした。副長が回避を宣言すると、航海長がどこに逃げればよいか尋ねます。それに対して副長が夾叉範囲外から逃れる為に速度を上げ距離を開けろと命令したのでした。航海長はこう返しました。

「ちょっと、逃げたら相手にケツ見せることになんだよ!? 被害が増えると思うんですけど。多少反撃した方がアタシはいいと思うわ」

これに対する副長は夾叉範囲外に出れば一切の問題は霧消するとやはり離脱を主張します。どちらの意見も一長一短あるため私は、取りあえず「もし撃つならば用意しておきますね」としか言えなかつたけれど、それも副長は必要ないといいます。そんなこんなで議論が平行線のまま、第三波がやつて来ました。

第三波発砲。この報には艦橋は対応できず、一切の指示も出せませんでした。

そしてこの一撃はとうとう大和に命中。第二マスト上端部に直撃し、第二マストのつぶんが吹き飛びました。また、帆に一部損傷が発生し、速度微減も確認されました。

これには第一・第三マストの両名が抗議。第二マストに仮に人がいれば、死んでいたことはほぼ間違いない、また自分達も今その危険な状況下にあることを考えれば、抗議は当然です。これに対して、副長は迅速な離脱を行わなかつた航海長の責任としてこれを非難。一方航海長は、仮に回避に出ていたら、第三マストに直撃していた可能性もありうるとして反論。

第四波。これはとうとう船体に命中。遠距離のため一次被害こそ無かつたものの、これによつて愈々艦内は混乱に包まれました。私は、反撃も可能であると何度も伝えましたが、副長は反撃によつて相手側に被害が出ることを避けたいとしてやはり反撃を認めませんでした。続く第五波も船体に直撃し、調理室で皿が割れる被害に遭つたそうでした。

この五度にわたる攻撃に、艦内は沈没への恐怖で指揮系統を完全に喪失しました。艦橋は射撃指揮所、マストを除く全ての場所への伝声管の蓋を閉じ、艦橋を閉じた空間としました。これは仕方ない判断としてある程度は擁護すべきと思うのですが、逆効果だつたとも思います。

艦橋では、初めは副長と航海長との間に侃諤とした議論が行われていましたが、このときには既にマストも混じつての喧喧囂囂としたカオスになつていきました。安全を求めるマスト。

安全な離脱を主張する副長。

離脱は安全でないと反論する航海長。

この議論とも言えない喧嘩の渦中で、射撃指揮所の私とはるちゃん、そして影の薄い

国東さんだけが平静を保っていました。

いつ第六波が来るかもわからないのに。こいつら何をしているんだろう、このままだと死ぬのが分からぬのかとも思いつつあるなかで、はるちゃんも今にも泣きそうでした。

そんなときに、とうとう国東さんが口を開いたのです。

「…副長。…七島珠洲の艦橋入りを…要望します」

十一話 鉄拳乱舞

七島珠洲の艦橋入り。

つまり解放。

七島珠洲の解放を提案します。

それはつまり、私よりも艦長の方がこの場に対応できるだろうと思われた、というこ
と。

ああ、やっぱりそうだと思った。

私は出来てなきすぎる。

でも：艦長に頼りたくはなかつた。

艦長が、やはり許せないのだ。

艦長には、ずっと閉じ籠つていただきたい。

「駄目です。私の一存で決められる話ではありません」

「：現在の責任者は副長：です」

「それでも、です。ここは、私で切り抜けられます」

「…ですが…」

カツときた。

そんなに信用されてないのか、私は。

そんなに艦長と比べて駄目か。

あの駄目艦長より下なのか、私は。

「ツ！私は副長です！私が責任者です！あなたさつき言つたでしよう！私の指示に従つてください」

「…わかりました。…折衷案…です。…砲撃を受けている現状を…舞鶴に連絡しましょう。…増援が来るまで…持ちこたえれば…」

「なるほど、ですが却下です。」

「…何故…」

「舞鶴への報告は原則として艦長が行うものです。現在は指揮は私ですからそれ 자체は問題ないですが、先生に七島珠洲はと聞かれたら答えようがありません。分かつてください。ここは逃げるしかないんです」

「…（ハア…）

大きな溜め息をついた国東さんは、それきりなにも言わなかつた。

「敵艦発砲！」

島村さんがまた叫ぶ。とつさにまた言う。

「か、回避！」

そうしたら、今度は常陸さんが怒り気味に言つた。

「だから無理つて、さつきからウチ言つてるよね!? いい加減にしてよ、ウチがハツキリ言おうか？ アンタ指揮官に向いてない！ 艦長の方がマシだとかそんなレベルじやない！ ずっといいよ！ 艦長あれでもちゃんと艦長してたんだつて痛感してる！ アンタ感じなの!? 艦長が、思つてた以上に仕事してたつてコト！」

「それは…」

思わずたじろぐ。

次の常陸さんの言葉は、痛かつた。

「アンタ分からないの!? アンタ、今この船にいる31人の命を背負つてんだよ!? アンタがテキトーな指示してるから、31人が死にかけてんだよ!? アンタのせいだ!!」

「…!!」

「いいから艦長を呼び戻してよ… いいや、アンタがしたくないなら私はもう舵を動かさないから！」

…国東ちゃん、艦長つれてきて

〔…了解、航海長〕

〔…ちょっと、勝手に…〕

「アンタ黙つて！いい加減メーワクだから」

「……」

もう、何も言えなかつた。

※

「…戦闘中だな」

しかもそういう被害を食つてるはずだ。余程敵艦に詰め寄られたのだろう。普通なら逃げるはずなんだが、反撃を優先したのだろうか？？

ふと時計を見たが、まだ「らつきべつ」との合流予定時刻は遠い。らつきべつが応戦してくれているとは考えづらい。敵がいくついるのか分からぬが、あまり戦況は芳しくなさそうだ。

「…艦長」

「え？」

詩歌がきた。

貴重な艦橋人員を一人削つてまでここに来るのは、上はなにやつてるんだか…

「…解放」

「本当か？」

何だ何だ、この期に及んで私が必要なのか？

「…（コクツ）」

「そうか、感謝する」

それだけ言つて、私達は艦長室を出た。

艦長室から艦橋までは短い。

「…艦長…あの…」

「なんだい」

「…ごめんなさい…」

「それは…、何についてだい？反乱を止められなかつたことかい？」

「…それもだけど…艦長を、珠洲ちゃんを…助けるつていう…前の約束…破つた」

ああ、あれか。

古い話だ。

国東博栄教授が、私と同い年の娘がいると言つて会わせてくれたのが、国東詩歌だった。

それまで、ある程度地理の話の通じる同じ学年で人間と会つたことがなかつた私は、学者の娘として幼少期より本棚から知識を吸い上げてきた彼女は、よく話の合う貴

重な友人だつた。呉に入つた理由は色々あつたが、その原点を辿れば、国東詩歌が呉に入る、と言つていたから、私も呉に入りたいなあと思つたからだつた。

「…そんな約束もあつたね。懐かしい」

だけど、と前置きして、伝えた。

「艦橋に戻つて来れたことだけで、私は助けられてるよ。そうしてくれたのは、詩歌だ」

「…珠洲ちゃん…」

「その言い方はやめてよ、恥ずかしいなあ」

気付くと素の口調が漏れていた。

素の口調がでるのは、中学の時までと、詩歌に初めて会つたときだけだつたかもしない。

大学では、碎けた会話なんて誰とも出来なかつたから。

ここでも、艦長としての威厳だなんだ言つて封印していたから。

碎けた口調で会話する相手は、なかなかいなかつた。

もしかしたら、なんだかんだ言つて私は、碎けた会話をしたかつたのかもしれない。

神宮寺と朝田みたいに。

機関科みたいに。

操帆科みたいに。

私以外の、皆みたいに。

砕けた口調で。

揶揄でも軽口でも何でもなく、ただ他愛もない話を。

その追想を破つたのは、ただ一人私と砕けた会話をしてくれる人だつた。

「…艦長」

「なんだい」

『珠洲ちゃん』ではない。口調は仕事モードに戻す。

「…お伝え…しなければ…ならないことが…」

詩歌の報告を聞いてから一分。

艦橋に立つて、副長の前に立つた。

私の代わりに艦長帽を被つた副長に。

「艦長…」

「高柳…」

私は高柳の顔を見て、そして思わず、

「このアホンダラア！歯あ食いしばれ！貴様それでも副長かーッ！」
柄にもない事を言つて、高柳の頬に鉄拳を叩き込んだ。

高柳はのけ反つて倒れた。艦長帽も飛んだ。

「がつ…」

「…（!?）」

「艦長!?」

みんな驚いてる。そりやそうだ、この船乗つて人を殴るのなんて、初めてに決まつて
る。

「…艦長…？」

高柳は何が起こつたか分からぬいかのように、殴られたところを抑えつつ目をパチク
リさせていた。

その間抜け顔にまた腹が立つて、

「立て高柳！ いつまで寝つ転がつてんだ貴様！」

軍人風に叱責する。

「艦長…」

高柳は立ち上がつたが、まだ何も分からぬみたいな顔をしていた。

私は高柳の胸ぐらを掴んで、そしてまた言つた。

「聞いたぞ！ 第二マスト上部破損！ 第一マスト帆損傷！ 船体直撃！ これじやあいいカモ
だぞ！ 貴様何を指示していた！ しかもこちらからは一発も撃つていないと？」

「…おい神若！何やつてた！？」

と、砲雷長の神若に言うと、

「副長は一切砲撃を許可しませんでした
…は？」

「…はあ？ そんなわけないだろ」

「それがあるんですよ。副長はずつと回避主張でした」

「…なにい？ ジヤあどうしてこんなに被害を食つてる。どう言うことだ航海長」

「ウチ悪くないし。回避したら余計に被害が出てたつてコト」

ほーお、成程、読めてきたぞ…：

「成程。規律を保つ上では仕方ないな、それは。

しかし、だよ、高柳？ ちゃんと敵がどこにいてどんな艦種かって把握しているか？」

「ひつ…し、してない…です」

「…まさか舞鶴に連絡入れることすらしてないとは言わないな？」

「うつ…そ、それは…」

高柳が返答に窮していた。

もうこの時点では察しはしたが、島村が伝声管で介入してきた。

「してないですよ副長は。舞鶴に連絡したら、艦長を軟禁していることがバレるから、

と

「う…いやその、これは…艦長…」

「もう一発殴らせろ」

「え」

「問答無用だ」

ガツ。

さつきとは反対側の手で、反対側の頬を殴つた。

殴ると、自分も案外痛い。

「痛いですって…仕方なかつたんですよ…」

何が仕方なかつた、だ。

私はもう呆れ返り、わざと大きな溜め息をついて、言った。

「高柳。お前は副長だろう。

日頃からお前が私の事をものぐさな反面教師艦長だと思つてゐることは知つてゐる。

知つてゐるが…、だからと言つて私から何も学ばないのか？私がした対応を思い出せないのか？そして、もしもの時のマニュアルが頭に入つていらないのか？とつさに対応することが出来ないのか？

私が死んだらどうしていた？連絡もしなければ、我々は突如失踪したことになるんだ

ぞ？この水深3000mの大海に沈んだかどうかも分からぬ。失踪位置も、どんな状況だつたかも分からぬまま、我々は死ぬんだ。それを回避するか出来ないかは、船の指揮官にかかっている。全ての責任が、指揮官の双肩には乗つかつてゐる」

「……」

「私は確かにものぐさだ。どうせできることを、わざわざやりたくない。天才の無駄遣いだ。だが、私は艦長としての責任その他を放棄しようとしたことはない。出来ないかもしれないことは、やりたくないたつてやらなきやいけない。天才とは完璧を求める姿勢だ。艦長としての責任は、常に意識してきた。お前には伝わつていなかつたかもしけないが」

「……」

『文句を言うなら、私に並んでからにしろ。』

……むかし籠原に言つた言葉だ。傲岸不遜の極みだが、私はやはり好きだよ』

「……え？」

「……なんでもない。昔話だ。高柳、お前は後で艦長室だ」

「はい」

「……よし。やるぞ」

「……へ？」

「何だ？」

「いや…、何をするんですか？」

落ちていた艦長帽を拾い、

「決まつてるだろ。分かつてるだろ？」

そして被る。

「応戦だ。私情は入れてくれるなよ、大和副長・高柳うしお」

「こちら艦橋。七島だ。

ただ今より、高柳うしおに代わって私が本船の指揮を執る。

大和乗員諸君。昨日諸君が私に言つたように、私はズルだと言われても仕方ない入学
経緯を迎つた。この点については、もし諸君がこの後、私に聞きたいこと、言いたいこ
とがあれば、言つてくれ。

ただし、今じゃない。

今本船は、敵の攻撃を受けている。既に第二マストの上部が吹つ飛ばされた。船体に
砲弾を直撃されてもいる。

このままでは、本船は沈む。この千島海溝の端、水深3000mの海に。

だが、私にはこの場を抜け出せる自信がある。だからこの場だけ私に任せてくれ。私情を一旦老いて、私の指示に従つてくれ。コレが終わつたら、また軟禁してくれても構わない」

ここで私は一拍置いた。

隣で詩歌が私を驚いたような目で見た。それはそうだ。また軟禁してくれても構わない、なんてことを言つたら、軟禁から解放してくれるのに奔走した詩歌と島村の努力を無下にしてしまうことになる。

だが、

「私に任せろ」

それぐらいの決意がないと、

「私は天才だからな」

「…」(二)を乗り切ることはできない。

「…異論があるものは言つてくれ」

30秒待つたが、異論は遂に出なかつた。

「武装輸送船隊、発砲！」

第一マストの島村が叫ぶ。

さつき私は高柳を叱った。これくらい反応しろ、と。

でも、私だつてそうだ。突然攻撃を受けたらそりやあ反応もできない。でも反応しなくてはならない。

自信がある、と言つた。

あるわけがない。

でも、ここから生きて帰らせるのは艦長の仕事だ。

艦長は船の最高責任者だ。常に見られる存在で、常に頼られる存在だ。

普段ふざけていても、ダウナーでも、艦長の仕事は時々、無差別にやつてくる。笑うことしか知らない天使が、顔色を変えず、屈託のない笑顔で舞い降りてくる。

戦闘経験はない。非戦闘艦だから当然と言えば当然だ。勿論演習くらいはしたが、実戦とは状況が違ひすぎる。けれど最適な方法を見つけなければならない。でないと一死ぬ。

私を現実から引き戻したのは、第一線からの冷静たる言葉だつた。

「今のはおそらく機銃の類いで、威嚇と思われます。射程外ですので直撃の心配はありません」

第一マスト見張り員の島村が報告。

ああ、本当に私は今、この人の命を預かっているんだ、と思つた。

「発砲してきた艦隊は4時の方向、2隻：かな。どちらも旧型の輸送船を改造し武装している模様：かな。ようやく見えてきた。識別信号やはり確認できない。詳細不明！」

続いて第三マスト見張り員の今井は素早く分かる限りの情報を提供してくれる。

ああ、本当に私は今、この人に信頼をされているんだ、と思った。

危険な役目だ。

でも買って出てくれている。

なら：

ならば、やらねばならない。

「こちら艦橋、七島から。各マスト見張り員は救命衣を着用し非常時に備え。危険なら生命を優先！なんなら海に飛び込んでも構わん！救助する！」

「りよ：了解！」

マスト達も当然こんなことには慣れていない。ましてや、第二マストが吹っ飛んだのを、自分たちもそうなるかもしれないということを、間近で見ていたはずだ。私はそのバツクアップを、できるだけのことをしなければ。

艦長帽の鍔を持つて目線まで下げて、言い放つ。

「総員、第一戦闘配置！」

繰り返す、第一戦闘配置！」

大和に乗船して、初めて言う言葉だった。

「はい…ええ、謎の襲撃を受けました。識別信号なし。民間改造船舶かと。松輪島西沖です。：柏原に戻りますか？：ええ、もうらつきべつが羅処和島に？：わかりました。進路を南東に変更し保護を受けます。：安全最優先で。はい。また連絡します」

舞鶴との受話器を置く。

「羅処和島に既に「らつきべつ」が待機しているから保護に行ける、と。」

「なんとかなれば良いですが…」

「にしても随分変な形の艦首してんねー」

「おそらく揚陸艦を転用したものだと思います。であれば、この艦首にも説明が着きます」

「しかしそれにしても艦長、実際どうしますか？」

「それが問題。管制室、聞こえてるか？」

ラッパを伝つたぐもつた声が帰つてくる。

「はい聞こえています。こちら砲雷長神若、威嚇程度であればいつでも撃てます。それ以上は期待しないでください。反撃には射程が貧弱です」

「わかった。詩歌、敵船艦種分かるか？」

「…（クルツ）」

詩歌はタブレットを見せた。画面には推定される敵艦スペックがまとめられていた。
 「ふむ、第103号型輸送艦。なになに…元々のスペックは8cm高角砲と25cm3連装機銃。改造され重武装になつていると見られ、12cm单装砲とおぼしき砲熗装備一基を増設している模様…となるほど、12cm单装砲の射程は？」
 と特に宛もなく聞くと、伝声管から冠の声が聞こえた。

「だいたい18000です。

ちなみに次に艦長が聞くのを当てましようか。うちのは射程はいくつか？ですよね、きつと。

…ボフフォースL70は12000届けば良い方ですね。」

図星だった。

「応戦は厳しいか…。ちなみに速度は？」

「…」

詩歌がタブレットをもう一度見せる。

「ふむ、16ノット…って、16ノット！」

ははは！これは傑作だ!!遅い！のろい！16ノット！いくら何度も改造受けてると
 はいえこの大和だって本気出せば風無しでも20は出るというのにか？

16だつたら100年前の大和だつて風次第でギリギリ振り切れる！よし、これは逃げ切れそうだぞ！うしお、距離は？」

「100000ちょいだそうです。ボフオース、届くんじやないですか」

それを聞いて冠がため息とともに言う。

「はあ…。じゃあ威嚇で撃ちますか？」

「うん、やろう。準備は？」

「できてますよ。先程も言いましたが、いつでも撃てます。当たるとは思いませんが、近くには行くようにします」

「わかつた。

作戦を説明するよ。…ま、作戦とはいえ逃げるだけだけど。速力でなんとか勝てそういうから。南東に逃げて「らつきべつ」の保護を待つ。風も味方をしているし、運悪く弾が来なきや逃げ切れる…いいね？」

「わかりました。それで行きましょう

「りよ。ウチに任せなつて！」

「o.k。進路転換、135。よーそろー！」

「よーそろーつと！」

「機関、第二戦速出せる？」

「大丈夫。長くは持たないけど、敵さんを降りきるまでは行けると思うよ」

「よし、射撃指揮所！任せる！」

「はい！よし、狙つて――――――――――――

そのとき、一番マスト・島村悠希菜が叫んだ。

「敵艦発砲！ 12cmです、来ます！」